

ことば、声、ころ	1
2021(令和3)年度「特定・指定研究」資料室「研究組織一覧」	2
2021(令和3)年度「指定研究」等研究目的紹介	5
2021(令和3)年度「一般研究」等研究組織一覧	10
2021(令和3)年度「一般研究」(新規採択課題)研究目的紹介	15
2021(令和3)年度東京分室PD研究個人研究紹介	19
国内研究調査報告	20
公開講演会・研究会	22
彙報	27

研究所報

ことば、声、ころ

研究・国際交流担当副学長 真宗総合研究所長 江森 英世

「大谷大学には、ことばがある。」これは、群馬から転動してきた私を感じた、大谷大学のよさの1つです。

正門には、「きょうのことば」が掲げられ、そのことばを選び出した選者の思いが投げかけられています。そして、それらのことばの中には、稲妻のような電撃を私に与えてくれるものがありました。例えば、蓮如上人の「そのかごを水につけよ」ということば、はたして、何人の学生がこのことばの威力を感じてくれたか分かりませんが、私にとって、これほど驚かされたことばもありませんでした。ここでは、紙片の都合で、私が、なぜ、このことばに衝撃を受けたのか、その詳細を詳しく述べることはいたしません、これまで少しずつ学んできた仏教という思想が、このことばとの出会いを通して、一段と深まったのも確かです。

私は、これまで西洋思想を基底とするコミュニケーション論を研究の方法論として学究生活を続けてきました。西洋で発達してきた近代コミュニケーション論では、メッセージとしてのことばは、物理的刺激物であり、それ自体には意味はないと考えます。確かに、文字という書かれたことば、声という音としてのことばは、そのことばを理解できない者には、ただの物にすぎません。しかし、私たちの祖先が、ことばを「言霊」と呼び、人の声に、深い畏敬の念を持ってきたことも無視することはできません。「そのかごを水につけよ」ということばが私に衝撃をもたらしたのは、記号としての文字ではなく、そこに一瞬たりとも、蓮如上人の声を聞き取ることができたからだと思います。

そしてさらに正門をくぐり抜けて行くと、「知進守退」という石碑や、それぞれ出典をもった名称がつけられた建物が、「あなたに、この名前の意味がわかりますか」と迫ってきます。例えば、新館の名称となった「慶聞」は、親鸞聖人の「斯以慶所聞、嘆所獲矣(ここをもって、聞くところを慶び、獲るところを嘆ずるなりと)」ということばだということが、本学の一員になることで、ようやく分かるようになりました。

また、学外施設的女子寮には、「自灯学寮」という名前がつけられています。これは、お釈迦様入滅の時に、弟子たちが、お釈迦様亡き後、どのように生きていけばよいのかを問うたときのお釈迦様のことば「自灯明 法灯明」から引用された名前です。一般には、お釈迦様が弟子の阿難に向け、「自らを灯明とし自らを所依とし、法を灯明とし法を所依とせよ」と諭したことばと理解されています。しかし、教育学の立場からみると、「自灯明 法灯明」というお釈迦様のことばには、もう少し深い意味があると思います。

話が少し飛躍しますが、講堂には、「歸命盡十方無碍光如来」という本学のご本尊が掲げられてあります。本学赴任以来、なぜ仏像ではなくことばなのか、ずっと疑問に思っていました、あるとき、そこに掲げられていることばから、親鸞聖人の声が聞こえてきたような気持ちになりました。そして、なるほど、親鸞聖人を慕う信者の皆さんは、あのことばを、親鸞聖人の声として受け止めていたことに気づかされました。

そして同時に、お釈迦様が「自灯明 法灯明」というときの「自」は、あなたの心の中に「私」がいるという意味なのだと思えることができました。師は、ことばを弟子に与え、そのことばは、弟子の中で声としていつでも復活します。師のころは、弟子が、我が師なら、こんなとき、何と言うだろうかという自問として生き続けるのです。多聞第一と称せられた阿難尊者に向けられた「自灯明 法灯明」ということばは、師であるお釈迦様のことばを第一に聞いてきた阿難に、「すでに私はあなたの中にいる。あなたの中にいる私の声に耳を澄ましなさい」と語りかけられたものではないでしょうか。つまり、ここでは、自と法が同じお釈迦様の教えを指していると、私には思えるのです。このことばには、教育者としてのお釈迦様の自信が刻み込まれています。でも残念ながら私には、まだお釈迦様の声は聞こえてきません。それゆえ、「自=私」と考えては、躓き転んでいるのかもしれない。

2021（令和3）年度「特定・指定研究」「資料室」研究組織一覧

■特定研究

研究名	研究課題及び研究組織	
Eラーニングを活用した「仏教・真宗」教育活動の展開	研究課題	eラーニングなど、インターネット環境を活用した新しい教育システムの開発・導入
	研究代表者	木越 康（学長・教授・真宗学）
	研究員	酒井 恵 光（准教授・計算機科学）
		一 楽 真（教授・真宗学）
		箕浦 暁 雄（教授・仏教学）
		戸次 顕 彰（講師・仏教学）
		本 明 義 樹（講師・真宗学）
	嘱託研究員	難波 教 行（真宗大谷派教学研究員）
松下 俊 英（真宗大谷派教学研究所助手）		

■指定研究

研究名	研究課題及び研究組織		
国際仏教研究	研究課題	諸外国における仏教研究の動向の把握と資料の収集・整理・公開	
	研究代表者	井上 尚 実	
	研究員	井上 尚 実（教授・真宗学）	
		Michael J. Conway（准教授・真宗学）	
		新田 智 通（准教授・仏教学）	
		松川 節（教授・人文情報学・東洋史学）	
		松浦 典 弘（教授・東洋史）	
		箕浦 暁 雄（教授・仏教学）	
		嘱託研究員	James C. Dobbins（オーバーリン大学名誉教授）
			Mark L. Blum（カリフォルニア大学バークレー校教授）
			Paul Watt（早稲田大学エクステンションセンター非常勤講師）
			下田 正 弘（東京大学教授）
	研究補助員(RA)	羽田 信 生（毎田周一センター所長）	
		Wayne S. Yokoyama（花園大学元講師）	
		Robert F. Rhodes（EB誌編集長、本学名誉教授）	
		John LoBreglio（EB誌編集者、オックスフォード・ブルックス大学准教授）	
		Dash Shobha Rani（本学教授・インド学・仏教学・貝葉写本研究・インドの古典芸能）	
三 鬼 丈 知（本学非常勤講師）			
大西 和 彦（ベトナム社会科学アカデミー宗教研究院客員研究員）			
千葉 一 生（博士後期課程第2学年）			
巖 若 琳（博士後期課程第3学年）			
Woo Jongin（博士後期課程第1学年）			

西藏文献研究	研究課題 研究代表者 研究員 嘱託研究員 研究補助員(RA)	チベット語文献のデータベース化 三宅伸一郎 三宅伸一郎(教授・チベット学) 上野牧生(講師・仏教学) 松川節(教授・人文情報学・東洋史学) 伴真一朗(2020年度西藏文献研究嘱託研究員) 李学竹(中国藏学研究中心研究員) 三輪悟士(博士後期課程第1学年)
清沢満之研究	研究課題 研究代表者 研究員 嘱託研究員 研究補助員(RA)	清沢満之の生涯と思想の研究—西方寺所蔵文献の研究— 西本祐攝 西本祐攝(准教授・真宗学) 一楽真(教授・真宗学) 福島栄寿(教授・近代日本仏教史・近代日本思想史) 西尾浩二(講師・西洋哲学) 名畑直日兎(真宗大谷派教学研究員) 山雄優生(博士後期課程第1学年)
東京分室指定研究	研究課題 研究代表者 研究員	宗教と社会の関係をめぐる総合的研究—社会的価値観における宗教の役割の解明— 井黒忍 井黒忍(東京分室長・東洋史) 青柳英司(PD研究員・真宗学) 鍾宜錡(PD研究員・哲学・倫理学) 荻翔一(PD研究員・宗教社会学) 陳宣聿(PD研究員・宗教学)

■資料室

名 称	研究課題及び研究組織	
大谷大学史資料室	研究課題 室 長	大学史関係資料の収集・整理 Dash Shobha Rani (研究所主事・教授・インド学・仏教学・貝葉写本研究・インドの古典芸能)
デジタル・アーカイブ 資料室	研究課題 室 長 嘱託研究員	大谷大学所蔵貴重資料のデジタル・アーカイブの構築 Dash Shobha Rani (研究所主事・教授・インド学・仏教学・貝葉写本研究・インドの古典芸能) 川端泰幸(博物館主事・准教授・日本中世史) Suchada Srisetthaworakul (古典写本研究センター・センター長) 〈タイ・アユタヤ〉

2021（令和3）年度「指定研究」等研究目的紹介

特定研究

eラーニングなど、インターネット環境を活用した新しい教育システムの開発・導入

研究代表者・教授 木越 康
(真宗学)

大谷大学は開学以来、仏教および真宗の学びを一般社会へと公開することを主要な目的として教育活動を行ってきた。このような根本理念をさらに積極的に展開するため、「Eラーニングを活用した「仏教・真宗」教育活動の展開」研究班を立ち上げた。本研究班では、インターネットを活用した、仏教ならびに真宗に関する教育機会提供システムを開発し、実施することを目的としている。これによって、これまで学習機会を得ることが出来なかった対象、たとえば一般の方はもちろん、宗教関係者、さらには海外に居住するより広い受講者を対象に、仏教・真宗を学ぶ機会を提供することが可能になると考えられる。

本研究班では、「仏教入門」に関するコンテンツ開発から着手している。「仏教入門」については、釈尊の生涯を軸に、各講義（①はじめに ②沙門の時代 ③青年ゴータマの歩み ④沙門となったゴータマ ⑤縁起の観察 ⑥最初の説法 ⑦仏弟子の誕生 ⑧入滅 ⑨おわりに）を行う。

2021年度は、以上のコンテンツに基づき、講義原稿の作成が完了したものから、順次撮影を行っていく。同時に現在は、それぞれ写真・地図・キーワード・経典の文章・言葉などを選定するという作業を行っており、それらを適宜、講義映像に取り込んでいく。

この「仏教入門」に関しては、研究最終年の2021年度後期にはテスト配信を行い、2022年度からの実運用開始に向けた態勢を整えていきたい。なお一方の「真宗入門」についても、随時準備を進め、研究期間の2年内を問わず可能となった時点で講義原稿の作成や撮影に取り掛かる予定である。

また、運用面では、今後の教育活動を本研究班が継続的に担うものではないが、関係諸機関からの協力も得つつ、適当と考えられる体制を構築していき、2022年度からの実運用開始に速やかに移行できるような準備を進めていきたい。本学として、こうした体制を整えることは、今後の新しい教育システムの構築へと直結していくであろう。

国際仏教研究

諸外国における仏教研究の動向の把握と資料の収集・整理・公開

研究代表者・教授 井上 尚実
(真宗学)

本研究は、諸外国における仏教を中心とした宗教研究の動向を把握するとともに、国際社会に対して本学の真宗・仏教研究を公開することを目的としている。欧米とアジアの言語文化圏を担当する二つの班を置き、それぞれ下記のような研究テーマで活動する。

研究テーマ

- ①欧米班：真宗を中心とした仏教研究の動向を把握し、真宗関連資料の翻訳出版、欧米の研究者・研究機関との共同研究を立案・推進する。
- ②アジア班 1) 中国：中国華北・東北・東部モンゴル地域の宗教と文化の研究、中国社会科学院歴史研究所との共同研究を行う。2) ベトナム：一昨年までの指定研究「ベトナム仏教研究」の成果をまとめる作業を中心とする。特に『日本仏教概説』のベトナム語訳を完成して出版する。

活動内容

《欧米班》

①国際学会への参加

1) 11月20～23日にテキサス州サンアントニオで開催予定のアメリカ宗教学会において以下のようなEBS設立100周年記念パネルを開催する。

テーマ：「The Eastern Buddhist Society: Past and Future」（EBSの過去と未来）

パネリスト4名：日沖直子（南山大学研究員）、マイケル・コンウェイ研究員（EBS内部顧問）、マーク・ウンノ（オレゴン州立大学教授）、ジョン・ロブレグリオ嘱託研究員（EB編集者）。ただし、オンライン開催になった場合は2022年度に延期する。

2) 12月26～28日にオンラインで開催予定のサーキャ・ディータ（仏陀の娘）の国際学会にショバ・ラニ・ダッシュ嘱託研究員を中心に参加する。

今年度参加予定であった国際仏教学会・国際真宗学会についてはCOVID-19のため延期になった。

②真宗関係の翻訳研究

1) カリフォルニア大学バークレー校東アジア研究所・龍谷大学世界仏教文化研究センターと合同の『歎異抄』のワークショップを再開実施する(状況的に可能となれば、3月にバークレーで)。

2) アメリカ真宗センターと『大乘の仏道』英訳検討の研究会を開催する(オンライン)。

③国際シンポジウムの成果出版

2015年の真宗近代教学アンソロジー『Cultivating Spirituality』出版記念シンポジウムの成果をマーク・ブラム教授(嘱託研究員)とマイケル・コンウェイ研究員の共同編集によりハワイ大学出版から『Adding Flesh to Bones』として刊行するための作業を行う。今年度中に校正を終えて来年度出版予定。

④国際シンポジウムの企画

2023年に本学で開催予定の国際シンポジウム「Enlightenment, Wisdom, and Transformation in the World's Religious Traditions」の企画を進める。

⑤The Eastern Buddhist Society 東方仏教徒協会(EBS)の事業

EBS設立100周年の節目に新たなシリーズが始まる英文学術誌『The Eastern Buddhist』誌 Third Series Vol. 1 No. 1, No. 2 (2021)の編集発行および東方仏教徒協会の運営。

⑥公開講演会の開催

現状では海外の研究者の招聘は難しいので、オンラインでの開催を検討する。

⑦真宗・仏教関係の欧文書籍・研究論文の書誌データ収集と整理

国際仏教研究が所蔵する欧文図書雑誌等について整理を行い、図書館への移管について、引き続き可能性を検討する。

《アジア班》

①中国社会科学院歴史研究所との学術交流協定に基づき、状況的に可能となり次第、双方の研究者が往来し、共同研究を実施する。

②2015年12月に開催した「中国古代史及び敦煌・トゥルファン文書研究」国際シンポジウムの成果として論文集を出版する。

③戦前、戦中期の大谷派の海外布教に関する研究会を開催する。

④『日本仏教概説』のベトナム語訳を進める(そのための研究協議・相互交流を実施する)。

西藏文献研究

チベット語文献のデータベース化

研究代表者・教授 三宅 伸一郎
(チベット学)

本研究班は、大谷大学所蔵の多数のチベット語文献のうち重要なものを、研究者が十分に活用できるようデータベース化し、電子テキスト化・デジタル画像化して公開することを目的としている。この目的を達成するために、本年度は以下の研究を行う。

(1)『プトン仏教史』第1章仏教概説部分の校訂テキストの作成・公刊

インド・チベット仏教史およびチベット大藏経成立史を研究する上での基本資料として詳細な研究がなされてきた本文の第1章仏教概説の部分は、14世紀チベットにおける仏教理解を解明する上で必要不可欠な資料であるにもかかわらず、未だ詳細な研究はなされていない。この現状に鑑み、当該箇所について、引用箇所の同定を行うとともに、本学所蔵のタシルンボ版(蔵外11841)をはじめとした各種版本・写本を対校した校訂テキストを作成し、公刊する。

(2)大谷大学図書館所蔵チベット語文献画像データの整理

『宗義の設定略撰・善妙の源泉』(蔵外12312)、『聖大集目連菩薩救母経』(蔵外12767)など撮影済みの文献の画像データを整理・PDF化し、将来の公開に向けて保管する。

(3)モンゴル国立大学との共同研究

この間の共同研究の成果発表として、昨年度の第1期(2013-2015)報告書の刊行に続き、第2期(2016-18年度)報告書の刊行を行う。

(4)『モンゴル仏教史』第1部の蔵蒙対照訳注の作成

2019年度に本研究班で刊行した寺本婉雅旧蔵『モンゴル仏教史』の第1部「モンゴルの王統」(1b1-22b4)部分について、モンゴル語版(デンマーク王立図書館写本及びウランバートル写本)との対照訳注を作成する。

(5)海外の研究者・研究機関との交流

中国蔵学研究中心との研究交流・共同研究を行う。

(6)2019~2021年の研究期間内の研究成果取りまとめのための公開研究会の開催

清沢満之研究

清沢満之の生涯と思想の研究 —西方寺所蔵文献の研究—

研究代表者・准教授 西本 祐攝
(真宗学)

本研究は、清沢満之の生涯と思想の研究において、重要な意義を持つ西方寺所蔵清沢満之の自筆文献（以下、西方寺所蔵文献と略）についての研究を進める。

本研究では、1998年度から、清沢満之自坊西方寺の全面的な協力をいただき、当時から現在に至るまでの研究員と研究補助員、補助者が蔵書整理、文献調査を実施し、調査カード、文献目録等を作成した上で、写真撮影を行い、内容精査を重ねてきた。その成果として西方寺所蔵文献の影印総コマ数 8500 枚超（36 枚撮りフィルム 248 本分）を所蔵している。これらの文献を依拠本とし、『清沢満之全集』（全 9 巻、2002—3、岩波書店）及び、『清沢満之全集』別巻（全 2 巻、2020—1、岩波書店）他を刊行している。

上記刊行物で公開されている西方寺所蔵文献は全体の 3 分の 1 程である。これは『全集』が清沢満之自身の著述を収録し、清沢満之の受講ノートや書籍からの抜書、索引等は収録しない方針で編纂されたことによる。未公開文献には、清沢満之の育英教校、帝国大学、真宗大学寮の頃から後年に至るまでの文献を確認できる。

本研究では、『全集』に掲載されていない西方寺所蔵文献の翻刻・校正を継続的に行っており、2016 年度終了時には全文献の翻刻を済ませ、一次校正に進んでいる。これらの文献について研究を進めることは、清沢満之の生涯と思想の研究に資するものであり、その内容精査とともに将来的な公開に向けた研究活動を継続する。

具体的には、次の 2 点を柱として研究活動を行う。

- 1、西方寺所蔵文献（未公開分）の研究
- 2、西方寺所蔵文献（未公開分）の公開に向けた研究

西方寺所蔵文献の未公開分には、清沢満之の生涯全般にわたる文献を確認することができるが、未だ十分な精査ができていないとは言い難い。その全貌について精査する研究を進める。

また、清沢満之の著述について、未収集文献を調査・収集・翻刻する活動も継続していく。

大学史資料室

大学史関係資料の収集・整理

室長・教授 DASH Shobha Rani
(仏教学)

大谷大学の公文書および、大学の歴史に関する様々な資料を収集、整理、管理および保存することが本資料室の主な目的である。それに加えて、資料や情報提供、保存資料の学内展示などを通して資料公開にも努めている。大学史資料の他に、パンフレットやノベルティなど大学発行物を大学史資料として保管していくことも目的としている。上記の目的を達成するために、2021 年度は以下の通り研究活動を推進する。

- ①大学史関係資料の収集、整理、管理および保存作業を実施する。その具体例として、総務課所蔵資料の整理、武田資料の整理と目録の完成作業、他機関からの寄贈図書などの目録・住所録作成などがある。
- ②年 2 回程度、図書館 1 階エントランスでのスポット展示を行う予定である。
- ③学内外の方々からの問い合わせに基づき資料収集し、資料提供をする。
- ④全国大学史資料協議会・西日本部会に参加する。得られた情報を本資料室の改善に向けて利用する。

デジタル・アーカイブ資料室

大谷大学所蔵貴重資料の
デジタル・アーカイブの構築室長・教授 DASH Shobha Rani
(仏教学)

本資料室の主な目的は、大谷大学が所蔵する貴重な学術資産をデジタル化し、それらを整理、保存すること、そしてそのデータを研究資料として公開、提供することである。2021年度は以下の研究活動を実施する予定である。

- ①大谷大学図書館所蔵古典籍の書誌学データベースの登録および公開に取り組む。2021年度において1150冊の古典籍のデータベース構築を目標とする。これらの古典籍のカタログは紙媒体のもののみがあったが、多くの研究者たちにこれらの古典籍の存在を伝え、研究に役立つようデータベースを構築する。本作業は2015年より継続中であり、現時点では約14,947冊の古典籍のデータベースは公開済みである。
- ②タイ王室より寄贈され、現在本学に所蔵されているパーリ語貝葉写本（以下「大谷貝葉」と略す）のデジタル化、整理、保存、公開及び研究を実施する。2021年度は「大谷貝葉」の64套の写本の撮影とデジタルデータの整理を目標とする。デジタル化によって所蔵写本の内容がより明白になり、国内外の研究者との共同研究が可能になる。
- ③「大谷貝葉」のデジタル化と並行して、『大谷貝葉目録』（大谷大学図書館出版）のデジタル入力完成及びそのデータベースの構築、貝葉付属の包み布の調査、貴重文献の整理の作業にも努める予定である。
- ④デジタル・アーカイブ化および写本研究に関する新たな技術・知見の集積を目的として、国際ワークショップやセミナーを定期開催する。

東京分室指定研究

宗教と社会の関係をめぐる総合的研究
—社会的価値観における
宗教の役割の解明—研究代表者・准教授 井黒 忍
(東洋史)

多様な価値観を内包する現代社会において、宗教のあり方が問いなおされつつある中、社会において宗教が果たすべき役割やその可能性をより多角的な視点から見直すべきとの声も多い。本研究は、宗教と社会との多種多様な関わり合いが見られる現代の東京という場において、専門性を異にする研究員たちが各自のディシプリンに基づく独自の視点から、社会における宗教の役割を問い直すとともに、宗教というフィルターを通して、社会に存在する、もしくは存在した様々な価値観の構造を明らかにすることを目指す。各研究員の研究目的は以下の通りである。

青柳研究員は、親鸞の『教行信証』に見られる仏教用語を、当時の他の仏教者がどのように用いていたのか調査・検討する。これによって、親鸞が当時の時代・社会の中で、どのような問題を見据えて言葉を紡ごうとしていたのかを探る。

荻研究員は、在日コリアンの人権獲得運動において日本の宗教組織・宗教者が担ってきた役割やその取り組みの特徴を明らかにし、現代日本の課題である「多文化共生」と宗教のかかわりを考察する。

鍾研究員は、「どう死ぬのか」という問題について、日本と台湾を中心に、終末期医療の法制化の動きを調査し、終末期の意思決定に関する宗教者の取り組みを考察することで、人生の最終段階における宗教の役割を解明する。

陳研究員は、日本と台湾におけるプロライフ運動と水子供養、子授けなどの儀礼に対する考察を通して、胎児観の変容における宗教の役割を究明する。これによって、公的と私的の二つの場面から議論を展開し、胎児観の立体的構築に繋げる。

井黒研究員は、研究全体のとりまとめを行うとともに、中国の歴史的事例に基づき地域社会における紛争の調停に宗教および宗教者が果たした役割について考察する。

2021（令和3）年度「一般研究」研究組織一覧

■共同研究

研究名等	研究課題及び研究組織	
一般研究（鈴木班） 【2017～2020年度「科研費」採択】 ※2020年度繰越に伴う活動継続	研究課題	変動帯の文化地質学
	研究代表者	鈴木寿志
	研究員	鈴木寿志（教授・文化地質学） 廣川智貴（准教授・ドイツ文学・文化）
	協同研究員	清水洋平（本学非常勤講師・特別研究員）
一般研究（武田班①） 【2018～2021年度「科研費」採択】	研究課題	5～13世紀ユーラシア東方における都城と仏塔の比較的研究と3Dアーカイブ作成
	研究代表者	武田和哉
	研究員	武田和哉（教授・歴史学・考古学・人文社会情報学） 川端泰幸（准教授・日本中世史）
	協同研究員	吉川真司（京都大学大学院教授） 横内裕人（京都府立大学教授） 藤原崇人（龍谷大学准教授） 正司哲朗（奈良大学教授） 古松崇志（本学非常勤講師・京都大学人文科学研究所教授） 高橋学而（藤川学園公務員ビジネス専門学校教員・特別研究員）
一般研究（武田班②） 【2018～2021年度「科研費」採択】	研究課題	歴史史料・考古資料活用による次世代作物資源の多様性構築に向けた学際的研究
	研究代表者	武田和哉
	研究員	武田和哉（教授・社会学・考古学・人文情報学） 三宅伸一郎（教授・チベット学）
	協同研究員	吉川真司（京都大学大学院教授） 渡辺正夫（東北大学大学院教授） 矢野健太郎（明治大学大学院教授） 江川式部（國學院大學准教授） 横内裕人（京都府立大学教授） 鳥山欽哉（東北大学大学院教授） 等々力政彦（埼玉県立自然の博物館任期制学芸員） 佐藤雅志（東北大学大学院学術研究員） 清水洋平（本学非常勤講師・特別研究員） 水谷友紀（京都府立大学非常勤講師）
一般研究（福島班） 【2018～2021年度「科研費」採択】	研究課題	新出資料の調査と分析に基づく沖縄仏教史・真宗史に関する総合的研究
	研究代表者	福島栄寿
	研究員	福島栄寿（教授・近代日本仏教史・近代日本思想史）
	協同研究員	知名定寛（元神戸女子大学教授） 長谷暢（法政大学沖縄文化研究所国内研究員） 川邊雄大（日本文化大学専任講師）

<p>一般研究 (村山班) 【2018～2021 年度「科研費」採択】</p>	<p>研究課題 西洋哲学の初期受容とその展開―井上円了と清沢満之の東大時代未公開ノートの公開―</p> <p>研究代表者 村山保史</p> <p>研究員 村山保史 (教授・西洋哲学) Michael J. Conway (准教授・真宗学) 西尾浩二 (講師・西洋哲学)</p> <p>協同研究員 味村考祐 (学習支援主任アドバイザー)</p>
<p>一般研究 (松川班①) 【2019～2021 年度「科研費」採択】</p>	<p>研究課題 モンゴルの世界遺産ブルカン・カルドゥン山に関する歴史文献学及び文化遺産学的研究</p> <p>研究代表者 松川節</p> <p>研究員 松川節 (教授・人文情報学・東洋史学) 三宅伸一郎 (教授・チベット学)</p> <p>研究協力員(支援) ARILDII BURMAA (2020 年度松川班研究協力員 (RA))</p>
<p>一般研究 (コンウェイ班) 【2019～2021 年度「科研費」採択】</p>	<p>研究課題 中国唐代・道綽浄土思想の基礎的研究</p> <p>研究代表者 Michael J. Conway</p> <p>研究員 Michael J. Conway (准教授・真宗学)</p> <p>協同研究員 齋藤隆信 (佛教大学教授) 宮井里佳 (埼玉工業大学教授) 大西磨希子 (佛教大学教授)</p> <p>研究協力員(支援) 三池大地 (2020 年度コンウェイ班研究協力員 (RA))</p>
<p>一般研究 (木越班) 【2021～2023 年度「科研費」採択】</p>	<p>研究課題 人口減少地域の宗教動態と仏教寺院の社会的役割に関する総合的研究</p> <p>研究代表者 木越康 (教授・真宗学) 東館紹見 (教授・日本仏教史学) 徳田剛 (准教授・地域社会学・社会学理論・宗教社会学)</p> <p>協同研究員 藤枝真 (准教授・宗教学・哲学) 藤元雅文 (准教授・真宗学) 斉藤仙邦 (東北福祉大学教授) 萩野寛雄 (東北福祉大学教授) 本林靖久 (本学非常勤講師・特別研究員) 野村実 (立命館大学衣笠総合研究機構専門研究員) 阿部友香 (佐久大学人間福祉学部講師)</p>
<p>一般研究 (鈴木班) 【予備研究】</p>	<p>研究課題 地質学からみた日本文化論の新構築</p> <p>研究代表者 鈴木寿志</p> <p>研究員 鈴木寿志 (教授・文化地質学) 藤田義孝 (教授・フランス文学・フランス文化) 三宅伸一郎 (教授・チベット学)</p> <p>協同研究員 三浦誉史加 (准教授・英文学・英米文化) 王秀梅 (同志社女子大学准教授) 梅田真樹 (京都西山短期大学講師) 青木三陽 (本学非常勤講師)</p> <p>研究協力員(支援) 西山昭仁 (独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・客員研究員) 石橋弘明 (2020 年度一般研究鈴木班①研究協力員 (支援)) 吉川宗明 (京進スクール・ワン教室長)</p>

■個人研究

研究名等	研究課題及び研究組織	
一般研究（佐藤班） 【2016～2021年度「科研費」採択】	研究課題	説話の生成に関する研究—貴族・寺院社会における記録の作成・管理との関連を中心に—
	研究代表者	佐藤 愛 弓（准教授・国文学）
一般研究（原田班） 【2017～2021年度「科研費」採択】	研究課題	ダンス教育で育てるからだを問う～ソマティクスとボディ・ワークのかかわりから
	研究代表者	原田 奈 名 子（教授・体育科教育・舞踊学および舞踊教育学・Somatics）
一般研究（池永班） 【2017～2021年度「科研費」採択】	研究課題	嗅覚刺激に基づく感覚間相互作用を活かした美術鑑賞教育法の実践的研究
	研究代表者	池 永 真 義（准教授・美術教育学）
一般研究（上野班） 【2017～2021年度「科研費」採択】	研究課題	世親作『釈軌論』の総合的研究
	研究代表者	上 野 牧 生
	研究員	上 野 牧 生（講師・仏教学）
一般研究（清水班） 【2017～2021年度「科研費」採択】	研究課題	東南アジア大陸部で発展した積徳行文献の体系解明
	研究代表者	清 水 洋 平（本学非常勤講師・特別研究員）
一般研究（渡邊班） 【2017～2022年度「科研費」採択】	研究課題	『甚深伝』校訂と解析によるミラレーパの仏教思想の解明
	研究代表者	渡 邊 温 子（特別研究員）
一般研究（翁班） 【2017～2021年度「科研費」採択】	研究課題	認知症患者との「関係性」についての新モデルの構築と展開—「主体」論を超えて
	研究代表者	翁 和 美（特別研究員）
一般研究（西川班） 【2018～2021年度「科研費」採択】	研究課題	タスク条件がもたらす日本人英語学習者のスピーキングへの影響
	研究代表者	西 川 幸 余（准教授・英語教育・英米文化）
一般研究（岡部班） 【2018～2021年度「科研費」採択】	研究課題	生活困難状況にある若者への離家支援としての共同生活型支援の実態及び有効性の検討
	研究代表者	岡 部 茜（講師・社会学・社会福祉学）
一般研究（鍾班） 【2018～2021年度「科研費」採択】	研究課題	儒教文化で捉える「孝」の表現と終末期医療倫理の再構築—日本と台湾の比較を中心に—
	研究代表者	鍾 宜 錚（PD研究員・哲学・倫理学）
一般研究（スミザース班） 【2019～2021年度「科研費」採択】	研究課題	Towards the Development of a Critical Learning Support System for Primary School Teachers of English
	研究代表者	Ryan W. Smithers（准教授・外国語教育・言語学・英米文化）
一般研究（徳田班） 【2019～2021年度「科研費」採択】	研究課題	日本の地方部における多文化化対応とローカルガバナンスに関する地域比較研究
	研究代表者	徳 田 剛（准教授・地域社会学・社会学理論・宗教社会学）
一般研究（高橋班） 【2019～2023年度「科研費」採択】	研究課題	キンギョから見る知覚統合の進化的基盤
	研究代表者	高 橋 真（准教授・比較認知科学）
一般研究（田中班） 【2019～2022年度「科研費」採択】	研究課題	民主化以降、世代交代がすすむ西アフリカにおいてメディアと若者が抱く「変化」の展望
	研究代表者	田 中 正 隆（准教授・社会学・社会人類学・民俗学・アフリカ地域研究）
一般研究（中野班） 【2019～2022年度「科研費」採択】	研究課題	社会改善活動へのソーシャルワーカーの参画可能性についての研究
	研究代表者	中 野 加 奈 子（准教授・社会福祉学）

一般研究 (上原班) 【2019～2022 年度「科研費」採択】	研究課題 『四六文章図』研究—日本中世から近世における駢体の「読み書き」をめぐる— 研究代表者 上原 尉 暢 (本学非常勤講師・特別研究員)
一般研究 (麻生班①) 【2019～2021 年度「科研費」採択】	研究課題 19世紀後半のドイツ語文学における「地方」と「ガリツィア」の表象の比較 研究代表者 麻生 陽 子 (講師・ドイツ文学・文化)
一般研究 (浦井班) 【2019～2021 年度「科研費」採択】	研究課題 田辺哲学の中期から後期への発展の解明—武内義範との交流を踏まえて 研究代表者 浦井 聡 (任期制助教・宗教哲学・特別研究員)
一般研究 (鎌田班) 【2019～2021 年度「科研費」採択】	研究課題 中世前期の飛鳥井家における顕昭の著作の受容の研究 研究代表者 鎌田 智 恵 (任期制助教・歌学・日本書紀受容史・特別研究員)
一般研究 (江森班) 【2020～2024 年度「科研費」採択】	研究課題 健聴児ならびに聴覚障害児の数学的コミュニケーションの認知-非認知能力の測定 研究代表者 江森 英 世 (教授・数学教育学)
一般研究 (西村班) 【2020～2022 年度「科研費」採択】	研究課題 地方社会の解体的危機に抗する〈地域生活文化圏〉の展開と課題 研究代表者 西村 雄 郎 (教授・地域社会学・コミュニティ論)
一般研究 (井黒班) 【2020～2024 年度「科研費」採択】	研究課題 アフロ・ユーラシア乾燥・半乾燥地域の水利権に関する比較史研究 研究代表者 井黒 忍 (准教授・東洋史)
一般研究 (井上班) 【2020～2022 年度「科研費」採択】	研究課題 支援が必要な子どもと親のための光・音・匂い環境を用いた『親子の遊び空間』の開発 研究代表者 井上 和 久 研究員 井上 和 久 (准教授・特別支援教育)
一般研究 (大原班) 【2020～2022 年度「科研費」採択】	研究課題 新たなソーシャルサポートとしての〈よりそう支援〉のモデル化に関する研究 研究代表者 大原 ゆ い (講師・社会学)
一般研究 (中西班) 【2020～2023 年度「科研費」採択】	研究課題 南インドの仏教受容に関する図像学的研究：カナガナハリ大塔を手掛かりに 研究代表者 中西 麻 一 子 (任期制助教・仏教学 (インド)・仏教美術史 (インド)・特別研究員)
一般研究 (山本班) 【2020～2022 年度「科研費」採択】	研究課題 戦国期の誓約をめぐる社会史的思想史的研究 研究代表者 山本 春 奈 (任期制助教・日本中世史・特別研究員)
一般研究 (狭間班) 【2020～2022 年度「科研費」採択】	研究課題 維新期における東本願寺の破邪論とキリシタン—樋口龍温の未公開史料の分析と公開— 研究代表者 狭間 芳 樹 (本学非常勤講師・特別研究員)
一般研究 (本林班) 【2020～2022 年度「科研費」採択】	研究課題 真宗地域における墓制と他界観に関する民俗学的研究 研究代表者 本林 靖 久 (本学非常勤講師・特別研究員)
一般研究 (青柳班) 【2020～2023 年度「科研費」採択】	研究課題 近世における『教行信証』の創造的解釈—智暹『樹心録』の研究— 研究代表者 青柳 英 司 (PD 研究員・真宗学)
一般研究 (陳班) 【2020～2021 年度「科研費」採択】	研究課題 現代宗教と胎児生命観の変容：日本と台湾の「プロライフ運動」を通して 研究代表者 陳 宣 聿 (PD 研究員・宗教学)

一般研究（阿部班） 【2021～2024 年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	集会的なニーズ・権利に関わるグローバルな正義の比較社会学的研究 阿部 利 洋（教授・社会学）
一般研究（喜多班） 【2021～2023 年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	植民地期前後における日朝間美術交流について 喜多 恵 美 子（教授・韓国朝鮮・美術）
一般研究（川端班） 【2021～2023 年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	南丹地域の歴史史料を活用した地域文化の発信と継承に関する研究 川 端 泰 幸（准教授・日本中世史）
一般研究（麻生班②） 【2021～2023 年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	19 世紀後半ドイツ語文学における「ガリツィア神話」の生成にかんする研究 麻 生 陽 子（講師・ドイツ文学・文化）
一般研究（平田班） 【2021～2024 年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	日本人学習者のための韓国語発音教案開発—語頭平音の音響音声学的考察を中心に— 平 田 絵 未（任期制助教・韓国語韓国文学・言語学・特別研究員）
一般研究（濱野班） 【2021～2023 年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	中国近世における儒・仏・道三教の死者儀礼と明朝宗教政策との関連について 濱 野 亮 介（本学非常勤講師・特別研究員）
一般研究（高橋班） 【2021～2023 年度「科研費」採択】	研究課題 研究代表者	9～13 世紀の北アジア諸民族国家における多民族共生社会成立の歴史考古学的総合研究 高 橋 学 而（特別研究員）
一般研究（松川班②） 【予備研究】	研究課題 研究代表者	北アジア仏教史の間隙（15～16 世紀）を埋める歴史学・考古学的研究 松 川 節（教授・人文情報学・東洋史学）

■ PD 個人研究

個人研究（青柳班）	研究課題 研究代表者	『教行信証』の解釈史の研究 青 柳 英 司（PD 研究員・真宗学）
個人研究（鍾班）	研究課題 研究代表者	「孝」思想に基づく終末期医療の法と倫理—儒教文化圏における「善終」の実践と意思決定制度の変遷— 鍾 宜 錚（PD 研究員・哲学・倫理学）
個人研究（荻班）	研究課題 研究代表者	現代における在日コリアンのキリスト教信仰に関する研究—1960 年代以降の韓国社会の宗教変動に注目して— 荻 翔 一（PD 研究員・宗教社会学）
個人研究（陳班）	研究課題 研究代表者	現代社会における宗教と胎児生命観の研究 陳 宣 聿（PD 研究員・宗教学）

2021(令和3)年度「一般研究」(新規採択課題)研究目的紹介

共同研究

人口減少地域の宗教動態と仏教寺院の社会的役割に関する総合的研究

研究代表者・教授 木越 康
(真宗学)

日本の伝統的地域の秩序形成に重要な役割を果たしてきた宗教施設に注目し、人口減少が住民に与える影響を宗教の視点から明らかにする。

特に伝統地域において仏教寺院の果たしてきた「役割」は大きい。この役割は近世の寺檀制度の影響を強く受けて成立したものであるとされ、近世仏教の墮落として非難されることにもなったが、近年、多くの民衆思想史の研究によってこのような見方は検証され、近世仏教寺院が地域の秩序形成と維持において重要な役割を果たしたことが評価されるようになった。

近代以降、旧制度は解消され、仏教各派も組織や制度の本来化もしくは近代化を推進してきたが、伝統的地域コミュニティで長く培われてきた宗教的風土は基本的には維持されたまま現在を迎えている。これは家族・親族、地域住民の「つながり」の中で醸成・継承されたものであって、背景には住民の身体に染み込んだ宗教感情があると言える。特に仏教寺院を介して行われた死者・先祖供養は、「生者と死者とのつながり」という独特の宗教的コミュニティを形成し、高齢者を中心に現在も地域住民の間で大切に守られている。それは地域住民の「生と死」に一定の意味を与え、「どこから来て、どこに行くのか」という人間の根本的問題にひとつの解答を提示するものであったとも言える。伝統的地域コミュニティにみられるこのような宗教性も、過疎・少子化、大都市圏への人口集中によって、解体の危機を含めて大きな変更を余儀なくされている。本研究では、特に人口減少が進む地域コミュニティにおいて、既述のような「地域と住民の身体に染み込んだ宗教感情」にどのような動揺や変動が起こっているのかを調査し、伝統宗教の今後の役割や持続可能性について総合的研究を行う。調査は宗教学・社会学・歴史学・宗教民俗学・真宗学の複数の学問分野の分析方法を用いながら、具体的には「寺院調査」・「地域調査」・「宗教人類学」・「宗教意識」の4つの研究体制で実施する。

共同研究(予備研究)

地質学からみた日本文化論の新構築

研究代表者・教授 鈴木 寿志
(文化地質学)

日本文化を諸外国と比較する際、宗教・民俗・言語・建築といった面から語られることが多い。例えば、欧州建築の「石の文化」と日本建築の「木の文化」の比較は、よく知られた例の一つである。一方で自然環境の面から論じた代表的著作として、和辻哲郎の『風土』や梅棹忠夫の『文明の生態史観』がある。これらの論考では、自然環境の中で特に気温、湿度(乾燥)、植生に重きを置いている。しかしそういった固有文化の成立が、私たちの住む「大地」の上に成り立っているという認識は比較的薄い。大地さらにその中身の地質が文化の成り立ちにどのようにかかわってきたのであろうか。日本および諸外国の地質に関わる文化研究を通じて、日本文化の地質学的特質について明らかにすることを目的とする。

人々の生み出す文化と地質の関係について、すでに先行科研究費において「文化地質学：人と地質学の接点を求めて」(挑戦的萌芽：H27～28年度)および「変動帯の文化地質学」(基盤研究B：H29～R2、R3において繰り越し継続中)の形で研究を進めてきた。その結果、日本では西洋とは異なる独自の宗教的地質観がみられることが浮き彫りになった。こういった観点が日本以外の国々にもあるのだろうか。諸外国の文化(ドイツ、オーストリア、フランス、イギリス、アメリカ、チベット、ミャンマー、タイ、ブータン、中国)に関わる研究者、および日本の宗教民俗・歴史学に関わる研究者とともに比較研究を進めることで、地質学からみた日本文化論の新構築を目指す。

個人研究

集合的なニーズ・権利に関わるグローバルな正義の比較社会学的研究

研究代表者・教授 阿部 利洋
(社会学)

冷戦後の世界では、頻発する内戦や環境災害、あるいは地域間格差の多様な現れを前にして、グローバルな正義の制度的実践がますます要請されるようになってきている。これまで主に、政治学・政治哲学の分野で「普遍的なルール策定の根拠を提供する理論研究」が、人類学・地域研究の分野で「グローバル規範に対するローカルの反応を相対主義的な立場から考察する実証研究」が、それぞれ蓄積されてきた。

上記の研究に見られる方向性の違いは、グローバルな正義概念の解釈が多様でありうることに加えて、「グローバル化の時代にグローバルなルールやパラダイムが必要である」一方で「そのルールやパラダイムを運用する際の基準や根拠について普遍的な落としどころはない」というジレンマが生じる実態を示している。また、地域研究による成果の蓄積からは、グローバルな正義が要請される社会の多くは司法や人権の分野に特有の課題を有するとともに、そのような正義の実践が社会統合の展望に影響することもうかがえる。つまり、グローバルな正義の効果・役割を理解するには、それが行われる社会の特質を踏まえた上で、公式目標の外部における作用も認識する必要があるのではないかと考えられる。

そこで本研究では「グローバルな正義の制度的実践が、どのような社会的影響を及ぼすか」という問いを設定し、とりわけグローバルな規範的作用が顕著に現れる集合的なニーズと権利に関わる制度・規範に焦点をあてる。具体的には、①集合的なニーズや権利に関わる文脈でグローバルな正義が要請される複数事例の比較検討を通じて、②制度の実施に伴う影響を、公式目標の外部に生じる社会的反応を含めて認識し、グローバルな正義の社会的機能を説明する理論モデルを提示することを目的とする。

個人研究

植民地期前後における日朝間美術交流について

研究代表者・教授 喜多 恵美子
(韓国・朝鮮美術)

近代美術における日朝関係は極めて重層的であるにもかかわらず、美術史研究においては日本人の活動と朝鮮人の活動が個々別々に記述されてきており、双方が具体的にどのような関わりをもったのかについての具体的な研究はそれほど進んでいるとはいえない。画壇における日本人と朝鮮人との交流様相の問題は、非対称的立場にあった日朝の美術家たちの間で、価値観や制度、画風や技法がいかに強要され受容されてきたのか、また反対にどのようなものが拒絶されてきたのかという問題とも深くかかわっており、植民地美術を考えるうえで抜きにできないトピックとなる。

本研究ではこれまでほとんど扱われてこなかった日本人美術家と朝鮮人美術家の交流に光をあてることを目的とし、その方法として美術家たちが残した記録や手稿を活用することで、より立体的に当時の画壇の実態を浮き彫りにしていく。

当時の日本人と朝鮮人の接触の様相も均一なものではなかった。流暢な日本語で日本人と交流した朝鮮人美術家がいるかと思えば、思想や言語の問題でまったく関わりをもたなかった人々も少なくない。逆に言葉が通じなくとも交流が成立していた例もあり、彼らの間で蓄積されたもの、放棄されたものがどのようなものだったのか、なにが共有され、なにが疎外されたのかといった事例をすくいと分析することで植民地期朝鮮画壇のアクチュアルな姿を描出していく。

現在、在朝鮮日本人画家加藤松林人の書き残した原稿の整理分析を進行中であるが、そこに記録されている京城在住の文化人たちの動態を手がかりに調査を進めていく。その他、日本人文化支援者の存在にも目を向け、美術界における日朝交流を幅広い形で捉えていきたい。

個人研究

南丹地域の歴史史料を活用した地域文化の発信と継承に関する研究

研究代表者・准教授 川端 泰幸
(日本中世史)

新型コロナ感染症が流行する前の日本には、海外より多くの観光客が訪れ、インバウンドも急増していた。インバウンドには文化の違いによって生じるトラブルなども少なからずあるが、アフターコロナの日本経済を考える際には、国内外の人びとの来訪を促進することによる地域振興が不可欠である。

そしてそのためには、地域の側が地域の文化や歴史を深く理解していることが求められる。観光タイプの一つである「歴史文化観光」では、その要因が「文化見聞」にあると指摘されているように、重要伝統的建物群保存地区や、寺社、城郭などを訪れる人びとは、地域の歴史という未知の文化に触れることを求めており、受け入れる側（自治体・学芸員などの専門家・観光業に関わる人びと・地域住民など）が、どれくらい地域の歴史を理解し、その魅力を発信できるかが重要な要素である。

しかし、歴史があまり明らかになっていない地域があるのも事実で、本研究が対象とする南丹地域もそうである。こうした課題に応えるのは、歴史学的手法を用いた古文書や伝承などの発掘と整理、そしてそこで得られた情報の地域への共有と還元である。

本研究は、南丹地域のおもに寺社などに所蔵され、しかもあまり知られていない古文書などの歴史史料を、地域振興にいかん活用することができるのかという課題に対して、史料の調査・研究をつうじて応えようとするものである。

すなわち、歴史学研究的素材として調査・研究されるにとどまっている歴史史料を、地域のもつ現代的課題、とりわけ観光資源を有する地域における観光の活性化と、地域振興のために活用する方法を見出すことを目的とする。

個人研究

19世紀後半ドイツ語文学における「ガリツィア神話」の生成にかんする研究

研究代表者・講師 麻生 陽子
(ドイツ文学・文化)

19世紀以降、都市部における社会構造の変化の影響を受けたオーストリア・ハプスブルク領ガリツィア地方は、帝国領内でもきわめて後進的で貧しい場所として、さらには両大戦のトラウマの記憶をもつ場所として知られている。近年ではポーランドやウクライナにおいても、失われたユダヤ文化がなおも息づくこの地の文化的豊饒さは、人を惹きつけてやまない憧憬の対象として見直され始めた。

こうした後世のイメージの形成に影響を及ぼしつづけるのが、19世紀以降のテキスト群によって形成されたガリツィアという文学的故郷にかんする言説（「ガリツィア神話」）である。ガリツィアは異なる宗教や民族同士の緊張・対立が絶えない場所でありながら、多様な民族や文化が調和的に共存・混在する場所として両義的に捉えられていった。本研究では、19世紀中葉以降に流行した「村物語」というジャンルの書き手であるカール・エーミール・フランツォースやレーオポルト・ザッハー＝マゾッホ、ヨーゼフ・ロートなどのドイツ語テキストを手がかりとしながら、ガリツィアという文学的故郷の形成について考察する。ガリツィアは都市と地方という関係性のなかで、現実との矛盾を孕みながらいかに美化して描かれていったのか。その背景にある工業化やナショナリズム、アメリカ移住といった同時代の社会現象にも着目する。

さらに「痕跡 (Spuren)」をキーワードとする近年のガリツィア関連の研究動向を意識し、ガリツィアの州都レンベルク（現リヴィヴ）をはじめクラクフ、プシェミシル、ブローディ等に現存する建造物にかんする調査も行う。この地に刻まれた「痕跡」と100年以上前の文学テキストの（非）連続性を示しながら、ガリツィア消滅後の現代にもなお影響を及ぼしつづける「ガリツィア神話」の諸相を明らかにすることを本研究の目的とする。

個人研究

日本人学習者のための韓国語
発音教案の開発—語頭平音の
音響音声学的考察を中心に—

研究代表者・任期制助教 平田 絵未
(韓国語韓国文学・言語学)

韓国語の破裂音・破擦音は、平音・激音・濃音の3項対立を持ち、平音においては語頭の位置で無声音として発話される。従って日本における発音教育でも、この語頭平音を日本語の無声音で発音するよう指導する。ところがここで問題となるのが、平音を単純に無声音で発音しても、韓国語を母語とする者（以降「韓国語話者」とする）に適切に知覚されないということ、多くの日本語を母語とする韓国語学習者（以降「日本人学習者」とする）たちが経験しているという事実だ。これは、日・韓両言語話者の間で、無声音として認知する音にズレが存在していることを示唆しているが、音韻論では同じ無声音であるため、これまで研究の対象とされてこなかった。

そこで本研究は、日本人学習者が韓国語の語頭平音を無声音だけでなく、有声音として認知するケースがあることを実験によって証明し、提示された音を無声音・有声音のどちらか一方に知覚する要因を音韻論的、音響音声学的側面から特定することを目的としている。

現在、語頭平音に対する日本人学習者の知覚データ約60,000個と、韓国語話者の発話データ約3,200個の収集が完了している。データの分析は20%進んでおり、既に韓国語の無声音に対して、日本人学習者の知覚に有声音が混在しているという事実の証明と、知覚傾向とVOT、pitch、intensityとの相関関係についての統計的検証が済んでいる。

この研究による成果は、日本人学習者に指導すべき音韻・音声知識の優先順位や、音節ごとに異なる聞こえの違いについて具体的に説明できる様になるばかりか、特に韓国語話者による直接法指導が出来ない環境において大きな指針となるものだと確信している。

今後は、残りのデータの分析をはじめ、日本人学習者の知覚に変化をもたらす要因について重回帰分析を行う。また、新たに生まれた課題についても検討を重ねながら研究を進めていきたい。

全てのデータに関する検証が完了する2024年には、日本人の知覚傾向に特化した韓国語発音教材の出版を目指している。

個人研究

9～13世紀の北アジア諸民族
国家における多民族共生社会
成立の歴史考古学的総合研究

研究代表者・特別研究員 高橋 学而
(考古学)

ロシア共和国連邦の東辺に位置する沿海州は、日本海に臨み、西南は中華人民共和国黒龍江省・吉林省、朝鮮民主主義人民共和国咸鏡北道、東北はハバロフスク州に連なっている。その沿海州の地勢は東北・西南方向に貫く全長1200kmのシホテアリン山脈を分水嶺として大きく二つに分けられるが、山脈東方のごくわずかな平地を残す山がちな日本海側にあっても、山脈西方に広がるウスリー江流域広大な平原上でも、今世紀、特に10年代以降、考古学調査が急速に進展し多くの資料の集積を見ている。その結果、従来知られていたアプリコンバヤ寺院址等以外に、クラスキノ古城内寺院、更に、近五年のうちに、目下断片的ではあるものの女真時代の複数の寺院址発見の情報にも接している。本研究は、北アジアに興亡した諸民族の関係性の実相を仏教寺院を中心として考察を試みることを目的としている。地上ではロシア、中国、北朝鮮が時に角逐する同地域について、その地下から見出された考古資料に抛りつつ摩擦・軋轢、そして一時的にせよ成立した共生関係と、示された様々な関係性の様相を見出したいと考える。目下、北朝鮮については様々な制約から最新の情報には接し難いが、中・露両国の研究の進展は著しい。情報の共有も一定程度なされている。ただ、当該地域に生活する少数民族の理解という点では、1860年の北京条約後にロシアに割譲された沿海州地方の位置付けを含めて、国家観・民族観等の相違が露呈している。

本研究は、北アジアに所在する仏教寺院の実態把握という基礎的作業を柱とし、衛星画像によって得られる情報の解析をも援用し研究の進展を図るものである。同時に調査対象地域の各地の関係機関に未発表のまま収蔵されている仏教遺物資料に関する資料整理とデータの集積を進める。これら衛星画像を活用した平面図の作成、また、寺院址・遺物の確認は、今後の同地域における歴史・考古・民族学研究に有用なデータベースの作成、充実の基礎となる。これは本研究の有用性と継続の必要性を明瞭に示していると考えている。

個人研究

中国近世における儒・仏・道
三教の死者儀礼と明朝宗教政策
との関連について研究代表者・特別研究員 濱野 亮介
(東洋史)

中国近世社会で行われた儒・仏・道教による死者に対する儀礼については、主に宗派別の教学的関心からの検討が進められた。しかし宋代以降に死者儀礼の中での孤魂（無縁仏）に対する儀礼の重要性が高まり、明代初期の洪武年間には、「祭厲」という国家祭祀制度に取り入れられるまでに至った。これは所謂三教合一の形の一つとして捉えられるが、これらを扱ったこれまでの研究がそれぞれの教学的関心によって行われていることが殆どであったためか、当時の社会情勢や宗教制度との関係性についての具体的な検討はほとんど進んでいない。

本研究は、近世以降の民間での孤魂儀礼の盛行の実像とそれらがどのように国家制度に取り入れられたかを明らかにすることを目的とする。そのための方法として、中国近世における儒教の喪礼、仏教の水陸会、道教の普渡儀礼という三教それぞれの死者儀礼に関する儀礼書の内容を検討し、当時の死者儀礼の中での機能や孤魂の扱いについて明らかにし、その上でそれらと明朝宗教政策との関連について考察を進める。

これらが明らかになることで、個別宗派的な儀礼研究に社会的な視点を導入することができ、さらに明朝が行った宗教政策の特異性も明らかにすることができる。

本研究で扱う儀礼書は、未整理な部分の多い仏教水陸会の儀礼書のうち、所謂「北水陸」の系統に属すると考えられる「天地冥陽」の名を冠する儀礼書（例えば『天地冥陽水陸儀文』など）を中心に整理・検討し、その上で明朝の公式な礼制儀礼集である『大明集礼』やその下敷きとなった『朱子家礼』、洪武年間に太祖朱元璋の命により当時の正一教道士によって編纂された道教の『大明玄教立成齋醮儀範』などと比較検討する。特に仏教儀礼書については、これまでの研究で整理されてきた中国・アメリカ・日本の版本だけでなく、韓国で刊行された版本も使用する。

個人研究

現代宗教と胎児生命観の変容：
日本と台湾の「プロライフ運動」
を通して研究代表者・東京分室 PD 研究員 陳 宣聿
(宗教学)

本研究の目的は胎児の生存権・生命権に立脚し、中絶の反対を唱える社会運動（以下は「プロライフ運動」と表記している）が日本と台湾における展開と宗教が中に演じる役割を検討するものである。

第二次世界大戦以降、超音波診断の技術は徐々に各国の産婦人科に応用され、可視化に伴って、胎児は妊婦の身体から独立する存在として見られるようになってきた。このような胎児の生命観の変遷に伴って、プロライフ運動は1970年代以降の欧米社会に展開され、中でも特にカトリック教会による中絶反対の旗は鮮明であり、中絶を含むいかなる産児制限に反対することが代表的な立場とも言える。他方、プロライフ運動は保守的宗教団体によって主導される側面が強いものの、宗教的な言説のみならず、科学・医学のレトリックを用いて「ニュートラル」な写真、映像を介して、人々に胎児の生命の大切さをうたえることは1980年代以降に顕著となってきた。プロライフ運動は国境を超える性質がある一方、各地の政治、宗教、社会とも密接している。本研究は日本と台湾を中心に、現代宗教と胎児生命観の変容を考察することを試みる。

本研究はまず文献資料を通して、日本と台湾におけるプロライフ運動の時間軸を描く予定である。その展開を踏まえ、日本と台湾におけるプロライフ運動の現状と関わる宗教組織への考察を展開する。日本と台湾に展開するプロライフ運動の特徴に関して、キリスト教の影響力は無視できないが、多宗教、宗派の連合の性質を持っていると考えられる。台湾において、2003年に成立された「尊重生命全民運動大聯盟」（以下は尊重生命大聯盟）がその代表格ともいえる。尊重生命大聯盟はカトリックを中心に、プロテスタント、仏教、道教などの複数の組織的宗教団体が加盟され、現在においても重要な中絶反対勢力として活動している。そのため、本研究は台湾の「尊重生命大聯盟」をはじめとする組織にインタビュー調査を展開し、内部の統合及び活動の様子を検討して行く予定である。

本研究は胎児の生命の大切さを語るプロライフ運動を通して、宗教と社会の関わり方を捉えることを試みる。

個人研究

南インドの仏教受容に関する図像学的研究：カナガナハリ大塔を手掛かりに

研究代表者・任期制助教 中西 麻一子
(インド仏教文化・インド仏教美術史)

1990年代より試験発掘が実施された南インド・カルナータカ州から、カナガナハリ大塔（造営時期：紀元前1世紀～紀元後3世紀）と名付けられた世界遺産のサーンチャー第1塔を凌ぐ規模の仏教遺跡が発見された。その後、インド政府考古局による本格的な発掘調査を経て、2013年には発掘報告書が出版されている（Poonacha, K. P., *Excavations at Kanaganahalli: (Sannati) Taluk Chitapur, Dist. Gulbarga, Karnataka, MASI No. 106*. Delhi: Chandu Press, 2013）。カナガナハリ大塔の考古学的遺品は、研究代表者による4度の現地調査成果を加えると、発掘報告書に未収録のものを含めて200点以上、そして碑文は300点以上が出土している。それらのうち、ブッダの伝記や前世物語などを描いたレリーフは、紀元前1世紀から紀元後2世紀頃に制作されたものであり、そのほとんどがブッダの姿を直接描写しない最初期の希少な作例である。

本研究は、紀元前2世紀頃より仏教僧団が、バラモン教やジャイナ教に先んじて、その教えを經典のみならず図像としても保存し伝承してきたという点に着目し、このカナガナハリ大塔から新出したレリーフを文献資料に基づく図像学的観点から解明するものである。仏教がその誕生地である東インドから南方へと伝えられていく伝播状況を、考古学的遺品に即して明らかにすることで、インド本土では失われた仏教僧団の教化活動や古代インド社会との関わりを見いだしたい。具体的な方法としては、(1)南インドを中心とする仏教遺跡の現地調査ならびに画像データのカタログ化、(2)出土した仏伝図の図像学的研究、(3)南インドの仏塔を装飾する文様の文献資料への比定、(4)収集した碑文の解読および分析、の4点を遂行し、仏教が南インドの文化基盤のなかでどのように受容されたのかを提示する。

個人研究（予備研究）

北アジア仏教史の間隙（15～16世紀）を埋める歴史学・考古学的研究

研究代表者・教授 松川 節
(モンゴル史)

アジア仏教文化圏の北限となるモンゴル高原において、いわゆる北元時代（14世紀後半～17世紀前半）の仏教史は史料的制約から不明な点が多かった。しかるに近年、モンゴル国東部のスフバートル県トゥヴシンシレー郡およびドルノゴビ県イフヘト郡のヘセグバイシン遺蹟において16～17世紀に年代比定される複数の仏教寺院址が見つかり、歴史史料の間隙を考古遺物・出土文献が補間する可能性が生じている。本研究は日本とモンゴル国の歴史学者・考古学者が協働し、新発見の仏教寺院址の発掘調査・年代決定と出土文献の解読および編纂資料の読み直しを通して15・16世紀の北アジアにおける仏教伝播の諸相を解明し、新たな北アジア仏教史構築のための基盤形成を目的とする。

研究は、1) 仏教考古遺物の研究と調査：トゥヴシンシレー郡の仏教寺院址出土遺物の研究・現地調査 [三次元景観記録と年代比定のための試掘、周辺のモンゴル語・チベット語・漢語岩壁銘文の調査] (2021年度)、2) 出土文献の文献学的解読研究：ヘセグバイシン遺蹟出土白樺樹皮文献の解読と現地巡検 (2022年度)、モンゴル国立博物館所蔵ヘセグバイシン碑文の解読研究 (2022年度)、3) 考古学的成果と歴史学的成果の統合：モンゴル国ウランバートル市におけるワークショップの開催 (2023年度)、以上3つの段階、3年計画であり、このうち予備研究としては、1) 仏教考古遺物の研究と調査：トゥヴシンシレー郡の仏教寺院址出土遺物の研究・現地調査 [三次元景観記録と年代比定のための試掘、周辺のモンゴル語・チベット語・漢語岩壁銘文の調査] を行い、この仏教寺院址の成立年代を特定し、周辺の岩壁銘文の調査・解読によってその年代を補強し、全体計画の基盤部分の構築を目指す。

本研究の意義は、①北アジア仏教史の再構築 ②モンゴル史再構築への試金石 ③国際共同研究への発展可能性の三点にある。

2021 (令和3) 年度東京分室 PD 研究員個人研究紹介

現代社会における宗教と 胎児生命観の研究

研究代表者・東京分室 PD 研究員 陳 宣聿
(宗教学)

生殖にまつわる文化は人類の歴史と同じように長く、いずれの時代においても新しい生命をこの世にもたらず特別な営みとみなされている。本研究は第二次世界大戦以降徐々に生じはじめた出産環境の医療化を背景に、胎児観の変容における宗教の役割を検討するものである。中でも特に日常生活に溶け込む宗教形態（民間信仰）が主流である日本と台湾に着眼して研究を展開する。在任の三年間、本研究は具体的に二つの現象に注視して展開する予定である。

一つ目は、胎児の生存権・生命権に立脚し、中絶の反対を唱える社会運動（以下は「プロライフ運動」と表記）が日本と台湾における展開である。本研究はまず議会の議事録、新聞紙、宣伝のパンフレット、教団出版物などを中心に文献調査を展開する。日本においては1970年代から1980年代の（旧）優生保護法の改訂運動、2017年「生命尊重の日」の条例化に関する議論という二つの事件を中心に検討する予定である。そして、台湾の方は2003年に成立した多宗教の組織「尊重生命全民運動大聯盟」を中心に、考察を進める予定である。上記する調査を通して、胎児の生命が法的・公共レベルでの展開と規範的側面を明らかにする予定である。

そして、二つ目は胎児や赤子の死、及び生殖にまつわる儀礼に関する調査である。水子供養といった夭逝した胎児を用う儀礼を中心に、子授けの祈願、遺体処理の変遷も視野に入れる。この側面は主に宗教施設を中心とするフィールドワークを通して実施する予定である。現代社会における妊娠、出産、胎児の死をまつわる儀礼への考察を通して、死生観、胎児観の変遷を把握できると考えられる。儀礼への考察によって、私的・個人的レベルから胎児の生命と宗教との関わりを明らかにする予定である。

本研究は上記するこの二つの側面への考察を通して、日本と台湾を中心に、東アジアにおける胎児生命観の立体的構築を展開することを試みる。

真宗総合研究所 刊行物紹介

真宗総合研究所では、年に1回、年度末に「真宗総合研究所 研究紀要」を発行しています。

研究紀要には、真宗総合研究所に所属する研究班・研究員の論文など、研究成果を多数掲載しております。また、全てにおいて、大谷大学学術情報リポジトリ (<http://otani.repo.nii.ac.jp/>) でも公開していますので、そちらもあわせてご覧ください。



大谷大学学術情報リポジトリは、上記の URL で検索していただくか、左の QR コードを読み込むことで、アクセスしていただけます。

2020

真宗総合研究所 研究紀要

38

大谷大学

真宗総合研究所 研究紀要第38号

国内研究調査報告（2020.10.1～2021.3.31）

鹿児島出張報告

東京分室 PD 研究員 青柳 英司

2020年11月14日（土）から15日（日）にかけて、井黒忍（東京分室長）・青柳英司（PD研究員）・鍾宜錚（PD研究員）・荻翔一（PD研究員）の4名が東京分室の指定研究の一環として、鹿児島市内で「隠れ念仏」に関する実地調査を行った。

戦国時代から幕末にかけて、島津氏が支配した鹿児島県、沖縄県、宮崎県諸県地方と、相良氏が支配した熊本県人吉地方では、浄土真宗（一向宗）が禁制されていた。これらの地域において、密かに真宗の信仰を継承した人々や、その信仰形態を指す言葉が、「隠れ念仏」である。

島津氏が真宗を全面的に禁止するのは、慶長二年（1597年）に出された島津義弘（薩摩藩初代藩主・島津家久の父）の置文からであるとされる。浄土真宗、特に本願寺教団は、15世紀の中葉以降、中興の祖・蓮如のもとで急速に拡大し、加賀守護の富樫氏を打倒した長享の一揆（1488年）や、織田信長と戦った石山合戦（1570-1580年）など、当時の政治権力と対立する例がしばしば見られた。このような本願寺教団の動向を受けて、島津氏は早くから真宗を警戒していたようであり、このことが慶長二年の全面的な禁令に繋がったと考えられている。

島津氏は真宗門徒に対して宗旨替えを迫り、隠れて信仰を続ける者に対しては、時に死罪や遠流に処し、過酷な拷問を加える場合もあった。特に天保年間には、

南国諸講々、去末年御法難蜂起仕、國中漏れず根葉を枯らし、嚴重の糾明、誠に以前代未聞の振に御座候。先男子は宗門座の庭に木馬を飭り、割木の上に座しめ、膝上に五六拾斤の石を乗せ、左右より短棒にて打擲致し、皮肉破れ血流、脚骨碎。女子は赤裸に成し、木馬に乗、或は隠門に大縄を挟ませ、双方前後より挽倒し、棒搗いたし、呵責に逢ひ候（『薩摩国諸記』『日本庶民生活史料集成』18・500頁）

という厳しい弾圧が起きている。このような状況の中で、薩摩などの真宗門徒は「隠れ念仏」として300年近くに渡り、信仰を継承していったのである。

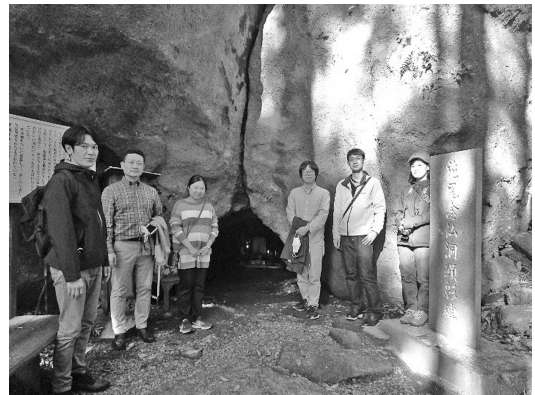
そこで東京分室では、当時の「隠れ念仏」の実態を

探ると共に、その経験が現代の鹿児島において、どのように受け止められているのか、あるいはどのような受け止めが模索されているのかという問題について、調査を実施することとなった。

公権力が特定の宗教を迫害・弾圧する事例は、世界史の中に広く見られるが、それは宗教の側にとっても、思想を深化させる重要な契機となっている場合が少なくない。そのため、今回のような事例を調査することは、宗教が社会の中にあるという事実を、より多角的に把握する一助となることが期待された。以下、本調査の内容を簡単に報告する。

なお、本調査に際しては新型コロナウイルスの流行に鑑み、参加者は事前に2週間の検温を実施し、体調に異常がないことを確認している。また、現地ではマスクの着用を徹底し、消毒用のアルコールを携帯して、こまめに手指の消毒を心がけるなど、十分な感染対策を実施している。

14日：鹿児島中央駅で、「真宗大谷派九州教区かくれ念仏検証実行委員会」の鳴一志氏らと合流し、氏らの案内のもと、ジャンボタクシーで鹿児島市内の関連史跡を巡る。初めに訪れたのは、「花尾かくれ念仏洞」。鹿児島市郊外の山中にある岩穴で、細く険しい階段を200メートルほど登ったところにあった。広さは4、5人がようやく入れる程度で、天井も低く、中で立つ



花尾かくれ念仏洞



土橋かくれ念仏洞

ことはできない。しかし、特別な日でもないというのに十人ほどの参拝者が訪れており、洞穴の中には真新しい花と酒が供えられ、蝋燭が灯されていた。ここは単なる史跡ではなく、現在も宗教的な空間として確かに機能していた。

次いで、日置市伊集院町の真宗大谷派願立寺へ向かう。同寺の住職から創建の由来や、願立寺が保管する『往昔殉教者調査控』について解説を頂戴する。また、同寺の本堂の欄間には、柱の中に本尊を隠していた様子や、門徒の殉教の様子などが刻まれており、当時の生々しい状況を窺い知ることができた。

最後に、「土橋かくれ念仏洞」を見学する。ここは民家のすぐ裏手にあり、案内がなければ、部外者は存在を知ることもできないような場所だった。入口は極めて狭く、這うようにしてようやく入れるほどだが、中は普通に立つことができる。しかし、洞穴の半分ほどは、土砂崩れによって埋まっていた。このように、存続自体が危ぶまれている念仏洞も少なくないらしい。また、令和2年7月豪雨の際には、球磨川流域の念仏洞に大きな被害が出たという。念仏洞の保全は、今後の大きな課題になっているということだった。

15日：真宗大谷派鹿児島別院を訪問し、別院が保管する資料や、「隠れ念仏」に関するパネルを見学する。本来の予定では、「かくれ念仏検証実行委員会」



真宗大谷派鹿児島別院

の方々にインタビューを実施することになっていたが、急な法務のために叶わなかった。そのため、鹿児島県立博物館の本館と黎明館を訪問。同館が所蔵する「隠れ念仏」関連の資料を見学した。

以上の調査を通して、鹿児島における「隠れ念仏」の実態の一端に触れることができた。しかし、真宗大谷派の中においても「隠れ念仏」への関心が高いとは言えず、関連の史跡も存続が危ぶまれるものが少なくない。そのような状況の中で「かくれ念仏検証実行委員会」の方々は、単なる歴史叙述に留まらない方法で、「隠れ念仏」という経験を社会に向けて発信されようとしていた。ここに、宗教から社会への関わり方の、1つの具体例を見ることができた。これらの知見を参考に、今後はより重層的な観点から、宗教と社会の関係性について研究を進めていきたい。

公開講演会・研究会（2020.10.1～2021.3.31）

公開シンポジウム「日本仏教を生きる女性たち」報告

東京分室元 PD 研究員 大澤 絢子

2020年10月25日（日）に公開シンポジウム「日本仏教を生きる女性たち」をオンラインにて開催した。本シンポジウムでは、丹羽宣子氏（國學院大学）、山内小夜子氏（真宗大谷派開放運動推進本部）、福島栄寿氏（大谷大学）にご報告をいただき、ダシュ・ショバ・ラニ氏（大谷大学）よりコメントを頂いた。当日の発表内容とコメントの概要は以下の通りである。

丹羽氏「『法華経の世界』を生きる一仏教教理と生活世界の交錯する場に着目して」では、日蓮宗の女性教師たちが直面する課題や困難をいかに乗り越えているのかについて報告がなされた。日蓮宗では既婚の女性教師が多いものの、住職として法務をする際に家族や親族のサポートが得られないことが多く、寺庭婦人の役割を兼務せざるを得ないという。また、女性であることで性差別的な出来事を経験した女性僧侶もいとされる。女性教師を取り巻く困難に対し、彼女たちは法華経の言葉を用いて、教師である自分と生活者としての自分の断絶を埋めたり、世俗の差別（さべつ）の言葉を仏教用語の差別（しゃべつ）に転化させたりして、生活世界と信仰世界を調和させていく努力が見られるという。丹羽氏の報告を通して、様々な葛藤を抱えながらもなお、法華経の教えを通して自らの責務を継続する女性教師の姿が示された。

山内氏「『女子』の得度—近代大谷派における女性の位置と役割」では、真宗大谷派において女子が男子と同じ条件で得度できるようになった1991（平成3）年までの経緯が教団史の文脈から示された。女性に対する差別的処遇が続けられてきたのは、それが「あたりまえ」のこととして正当化されてきたからであり、その背景には、五障・三従の女人、変成男子といった仏教の女性観が関係している可能性があるという。さらに、ジェンダーバイアスのかかった経典解釈や儀式を、現代での「あたりまえ」のこととして持ち込んで良いのか、一度立ち止まって考える必要があるという指摘がなされた。

福島氏「近・現代真宗大谷派の女性教化の特徴—その教説から読み解く」は、真宗大谷派の女性教化の歴史が、女性を罪深いとする存覚や蓮如の論調と基本的

に変わるものではなかったとの指摘がなされた。その上で、そうした価値観に服従し、そのような教説を信じるのが女性の解放や救済であると言えるのか、考える必要があると訴えた。真宗が従来からの女性教化を続けていけば、性意識の多様性に適応できず時代に取り残されかねないという。最後に、新しい真宗の語りとして、クイア仏教学の可能性が提起された。

ダシュ氏によると、明治以降の日本における女性と仏教の問題は、サンガ結成の数年後から存在した問題でもあるという。また、2500年間の仏教の歴史において、どの時代のどの仏教における女性を対象とするか、あるいは在家や出家など、どのような女性を対象とするかによって、考察の結果も変わってくるはずであるとの意見も出された。さらに、上座部仏教では昔は比丘尼が存在したが、現在では比丘尼が正式に認められていないことから、日本の状況が一つの希望とみなし得るといふ。最後に、釈迦も社会の一員として社会の意見を尊重しており、社会のなかの仏教という位置づけは釈迦当時も現在も変わらないとの指摘がなされた。コメントの後の質疑応答には、その他の参加者も加わり活発な議論がなされた。

以上のように本シンポジウムは、日蓮宗と真宗大谷派の事例を通して、僧侶の妻帯と在家化に伴って生じた女性の生きづらさの実態と、日本仏教界を生きぬく女性たちに葛藤や困難をもたらしてきた構造について考える機会となった。

公開研究会「臨床宗教師から考える 仏教の現在と未来」報告

東京分室室長 井黒 忍

高野山真言宗寺院の住職で、臨床宗教師としても幅広く活動されている井川裕覚氏を講師に招き、2020年12月7日（月）にZoomを用いたオンライン公開研究会を開催した。井川氏の報告「臨床宗教師から考える仏教の現在と未来―「死への恐怖」にどう向き合うか」を通して、臨床宗教師とはどのような存在で、現場ではどのような取り組みが行われているのかといった臨床宗教師としての実践やコロナ禍での課題を学び、議論を行った。

井川氏の報告は、(1) 仏教の歴史から考える、(2) 臨床宗教師の誕生、(3) 人生の最終段階における取り組み、(4) 仏教の現在と未来を考える、という4項目から構成された。報告では、「仏教と臨床の接点」という角度から、仏教は社会問題といかに向き合ってきたのか？臨床の現場でなぜ仏教（宗教）が求められるのか？医療福祉の現場で実際にどのようなケアが行われるのか？ケアに仏教が関わる意味は？といった問題と、これらに対する見解が述べられた。

まず、戦前の仏教と社会に関しては、仏教が政府のいわゆる御用宗教と化し、福祉に関する国家事業の補完的役割を担うに止まったのに対して、現代においては社会に役立つ宗教が評価されるという状況のもと、その活動が経済的・市場的な損得勘定の中で評価されることになったとの指摘がなされた。

次に、臨床宗教師の誕生の背景には、東日本大震災の復興支援の中で火葬場での読経ボランティアが行われ、死者に対する葬儀執行という宗教的ケアがなされる一方で、信教の自由への配慮から布教は行わないという決まりが設けられたという経緯がある。この活動に医療者・研究者が合流し、「心の相談室」として再編され、宗教相談へと拡大していくなど、臨床宗教師は教義や学説からではなく、現場の必要から生まれた。臨床宗教師とは、欧米のチャプレンに対応する日本語として創出されたものであり、公共空間で心のケアを提供する、公共的な性格を有するが、布教や伝道を目的とせず、傾聴を基軸とした「スピリチュアルケア」を行う宗教者である。現在では、倫理綱領に基づいて臨床宗教師の養成が行われている。臨床宗教師の行うケアとは、ケア資源を活用して、ケア対象者（患者、

家族、ケア提供者など）が「自身の支えとなるものを（再）確認・（再）発見し、さらに獲得する営みを支援すること」と定義される。

人生の最終段階における取り組みでは、ひとり一人が死にゆく過程で喪失する物事の価値や意味を共に確認・発見することが重視される。その際には、傾聴とニーズの把握に続き、宗教的アイテムの配布などの外的宗教的資源とともに、ケア提供者の宗教性である内的宗教的資源を活用することで、ケア対象者の感情を表出させ、新たなニーズを引き出すことが可能となる。

さらに、近年の宗教の社会的実践において、既存の教義や修業体系を一方向的に説くのではなく、社会問題の現場と仏教の伝統を結び付けようとするのが重要である。臨床に宗教者が関わる意義として、ケア提供者の宗教性が対象者に及ぼす影響は大きく、臨床宗教師の布教や宗教行為は禁止されているが、内的宗教的資源がケアに有効に働く場合もあるとの指摘がなされた。

最後に宗教者が臨床現場で求められているものとして、宗教者自身が死の問題をどのように考えているのか？いかに生きているのか？宗教に救われているのか？いかなる「安心」を与えられているのか？という問題が提起された。宗教的儀礼を通じて宗教的ケアを行いながら、その人の最期まで一緒に歩む伴走型の支援を提供するのは、現代社会における宗教者の存在意義であり、宗教の新たな社会的実践のあり方でもあると結論づけられた。

公開シンポジウム「東アジアの近代化における仏教と西洋哲学の影響関係—中・朝・日の思想家たちの証言—」

2020年度一般研究加来班 研究代表者 加来 雄之

本シンポジウムは「東アジアの近代化における仏教と西洋哲学の影響関係の解明と国際的連携体制の構築」を目的とした共同研究（加来班）の一環であり、2021年2月20日（土）9時50分から18時まで、中国、台湾、韓国、日本の研究者によるオンライン会議として開催された。本来であれば、2020年6月に大谷大学を会場として開催されるの予定であったが、新型コロナウイルスによるパンデミックの影響により、何度も開催の延期・形態の変更を余儀なくされた。最終的にはZoomによるWeb会議で実施することになった。そのような状況においても、研究発表者と司会担当者の他に、本学、他大学の学生、また関連研究所などから参加があり、総勢26名での開催となった。

シンポジウムは、加来雄之（大谷大学）の開会挨拶の後、7名の研究者よりそれぞれ25分の研究発表があり、その発表に対する15分の司会者からのコメントと質疑応答が中国語・日本語の同時通訳によって行われた。発表者と発表題目と司会者は以下の通りである。（※掲載順は発表順番・所属は開催当時のものである）

1. 林鎮国（台湾・政治大学）
逆向きの教相判釈—牟宗三哲学再考—
司会 朝倉友海（日本・東京大学）
2. 李海濤（中国・山東大学）
韓龍雲の『仏教維新論』とその近代意識
司会 金浩星（韓国・東国大学）
3. 川邊雄大（日本・日本文化大学）
幕末明治期における真宗僧とキリスト教・東洋学・西洋哲学—松本白華を例として—
司会 福島榮寿（日本・大谷大学）
4. 長谷川琢哉（日本・東洋大学）
東アジアにおける井上円了の影響関係について
司会 名和達宣（日本・真宗大谷派教学研究）
5. 龔隼（中国・広州中山大学）
鈴木大拙と近代東アジアにおける大乘論述の確立—英訳版『大乘起信論』（1900年）・『大乘仏教綱要』（英文1907年）を例として—
司会 マイケル・コンウェイ（日本・大谷大学）
6. 浦井聡（日本・大谷大学）

浄土が〈ある〉ことをめぐって—田辺元と武内義範を手がかりに—

司会 竹花洋佑（日本・大谷大学）

7. 廖欽彬（中国・広州中山大学）

仏教とニヒリズム—阿部正雄を中心に—

司会 浦井聡（日本・大谷大学）

今回発表者によって取り上げられた近代東アジアの8名の思想家は、中国・朝鮮・日本、立場も僧侶・居士・哲学者など様々である。彼らは、西洋哲学を学ぶのみならず、東洋思想を、とくに仏教を普遍思想として受けとめることを手がかりとし、新たな主体を確立する言説空間を創出しようとしたところに共通点がある。発表者たちは、それら思想家たちの言説が、当時の時代社会に与えた影響やその本質また限界などを明確に提示した。また発表後には、司会者からのコメントを中心とし、参加者も加わった活発な議論が行われ、本シンポジウムの成果が、今後の研究の発展の足掛かりとなっていくことを確信させるものであった。発表終了後は、全体の発表を受けての総合討議が、予定の1時間を超過して行われた。織田顕祐（同朋大学）からの閉会の挨拶をもってシンポジウムは終了したが、その後もオンライン上で懇親会がもたれ、今後の研究課題や次回の開催方針についても意見が交わされ、本シンポジウムが目的とした国際的連携の構築の役割も十分に果たせた。これらの研究発表は本学の学術雑誌『真宗総合研究所紀要』『大谷大学年報』『親鸞教学』に論文として掲載の予定である。最後に本研究所はじめてのWeb国際シンポジウムの準備・運営にあたって本学博士課程の常塚勇哲君の尽力を得たことを申し添えておきたい。



シンポジウム開会式の様子

国際シンポジウム アジアにおける写本と資料のデジタル保存

デジタル・アーカイブ資料室室長 DASH Shobha Rani

デジタル・アーカイブ資料室の研究活動の一環として、2021年2月26日に「The Digital Preservation of Asian Manuscripts and Documents」という題名でハイデルベルク大学（ドイツ）のNepal Heritage Documentation Projectとのオンライン共同シンポジウムが実施された。今回のシンポジウムでは、日本、チベット、タイ、ネパールの写本および史料に関するデジタル・アーカイブの取り組みおよび研究が報告され、デジタル・アーカイブ資料室の今後の活動に役立つ多くの情報が得られた。大谷大学長木越康教授によって開会の辞が述べられ、真宗総合研究所長浦山あゆみ教授によって閉会の辞が述べられた。筆者は本シンポジウムの趣旨を説明し、ハイデルベルク大学と大谷大学の順番で発表が行われた。真宗総合研究所国際仏教研究班の井上尚実研究員による司会のもと、シンポジウムがスムーズに進行された。

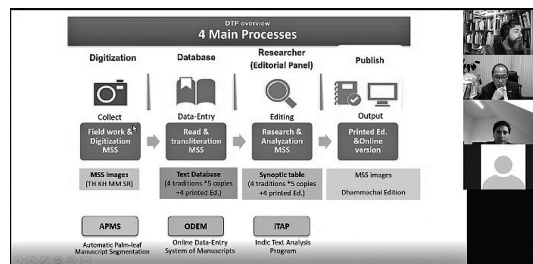
ハイデルベルク大学の研究者たちはネパールの史料、文化財のデジタル化、公開に関する取り組み、技法、使用ツールについて発表した。デジタル・アーカイブ資料室の発表内容としては、資料室全体の取り組みの紹介（発表者：ダシュ）、東南アジアの仏教系貝葉写本の撮影、入力、編集技法（発表者：スチャータ・スリセッタヴォーラクル、デジタル・アーカイブ資料室嘱託研究員）、チベット文献のデジタル化（発表者：三宅伸一郎、チベット文献研究班研究員）であった。真宗総合研究所国際仏教研究班のマイケル・コンウェイ研究員、チベット文献研究班の松川節研究員、東京分室長井黒忍研究員など多くの先生方の積極的な参加は班を超えて学際的な研究に取り組むという真宗総合研究所が目指す考えの模範ともなったと言えるであろう。10か国以上の約150人に及ぶ研究者が興味を持ち参加したことが、今後のデジタル・アーカイブ資料室の活動に大きな刺激を与えた。このような国際的なネットワークを築き、今後もデジタル・アーカイブ資料室の活動を広く公開していくことにつとめる。



本学会場



オンラインシンポジウムの様子



スチャータ・スリセッタヴォーラクル嘱託研究員の発表の様子

公開シンポジウム「近現代日本の監獄教誨と宗教」 報告

東京分室室長 井黒 忍

2021年3月13日（土）に公開シンポジウム「近現代日本の監獄教誨と宗教——教誨師のジレンマが語るもの」をオンラインにて開催した。本シンポジウムでは、日本学術振興会の繁田真爾氏、慶應義塾大学のアダム・ライオンズ氏にご報告いただき、コメントーターとして、名寄市立大学の江連崇氏にご登壇いただいた。

繁田氏からは、「戦前日本の監獄教誨——異端的教誨師の系譜から考える」との題にて、監獄（刑務所）に収容された人々を「悔過遷善」（更生・矯正）し、社会復帰を促す教誨師が抱えるジレンマについてご報告いただいた。戦前の監獄教誨は明治20年代以降、ほぼ浄土真宗が独占する状況にあったが、彼らは様々なジレンマに直面していた。まず、他者の完全な矯正は極めて困難であるという現実である。人は誰しも罪を犯し得る存在であり、特に真宗大谷派の清沢満之らは人間の罪業性を強調していたが、戦前の教誨師は国家公務員であり、囚徒の更生・矯正を推進しなければならない立場にあったからである。さらに、「矯正」と原理的に矛盾した「死刑」の存在である。「死刑廃止」を理想とする教誨師もいたものの、彼らは現実と国家制度との間で後ろめたさを感じ、また死刑囚に寄り添わねばならないという使命感に苦しむこととなった。このようなジレンマに注目することによって、表面的な制度史を越えた歴史の深層を探求することが可能となるとの提言がなされた。

アダム・ライオンズ氏の報告「戦後から現代の宗教教誨—教誨師のジレンマにみる—」では、はじめに教誨の歴史を概観した上で、現代における各宗派の教誨マニュアルの作成についての紹介がなされた。それらのテキストは教義に沿うかたちで犯罪が起こる原因を「心の問題」（私的な領域）に求め、宗教教育によってその心を清め、社会復帰に貢献できるとする共通の論理がある。しかし実際には、犯罪は貧困問題や社会の構造など政治的な問題（公的な領域）と密接に関連しており、教誨師は被収容者と向き合う中でそうした現実と対峙することになる。ここに教誨師の抱えるジレンマがあり、教義の限界を超えて、被収容者に対してスピリチュアル・ケア（心のケア）を行おうとする教

誨師の例が説明された。報告を通して、テキスト上の教誨と現場での教誨が乖離している現実が浮き彫りにされた。

これらの報告を受けて江連氏からは、社会福祉史の視点よりコメントを頂いた。まず、監獄教誨は歴史学・宗教学・法学・社会福祉学など多面的な考察を必要とするテーマであり、吉田久一の社会事業史としての教誨研究の重要性が示された。その上で江連氏は、教誨師が被収容者の悪に向き合うことで自分自身の悪にも向き合うことになる述べ、犯罪の背景としての社会構造的な問題をいかに共有するかという点が重要であると指摘された。

悪を「漂白」という近代的な価値観に対しては、教誨師のみならずソーシャルワーカーも共通する矛盾を抱えている。社会福祉援助実践の場におけるソーシャルワーカーとしての「私」と、個人としての「私」との間のジレンマ、さらに社会構造を作り出したのは「私」でもあり、犯罪の背景を作った側に「私」も含まれるといったジレンマの存在が指摘された。同時に、教誨師が被収容者に共感し、共に歩き続けるにはジレンマが不可欠なのではないかとの視点から、ジレンマの可能性と宗教的福祉実践の可能性が論じられた。

コメントに対する報告者のレスポンスの後、教誨師の男女比や性差による教誨の方法の違いの有無や真宗の教誨師と教義の関連性、一般教誨と宗教教誨の差違、セラピーとの関係、宗教的福祉の可能性、さらには思想犯や政治犯に対する教誨の問題など、教誨師と宗教に関して多角的な質疑がなされ、報告者およびコメントーターとの間で充実した討論がなされた。

真宗総合研究所彙報 2020. 10. 1 ~ 2021. 3. 31

■研究所関係

◎研究所委員会

◇2020年10月9日(金)16:30~17:50

(響流館4階会議室)

1. 『真宗総合研究所研究紀要』第38号査読者について
2. 2021年度一般研究について
3. 東京分室PD研究員公募について
4. その他
・報告事項

◇2020年11月6日(金)16:30~17:50

(響流館博綜館5階会議室)

1. 2021年度「特定研究・指定研究・資料室」の研究計画について
2. 報告事項
3. その他

◇2020年11月27日(金)16:30~17:50

(響流館4階会議室)

1. 『真宗総合研究所研究紀要』第38号投稿論文の査読結果について
2. 一般研究木越班研究組織について
3. その他
・報告事項

◇2020年12月3日(木)~12月7日(月)17:00まで

(サイボウズによる書面会議)

1. 『真宗総合研究所研究紀要』第38号投稿論文の査読結果について

◇2020年12月21日(月)~12月23日(水)17:00まで

(サイボウズによる書面会議)

1. 『真宗総合研究所研究紀要』第38号査読結果に係る要望について
2. 報告事項

◇2021年1月12日(火)16:30~17:50

(博綜館5階第4会議室)

1. 東京分室PD研究員の採用について
2. 2021年度「一般研究」について
3. その他
・今後の予定

◇2021年2月24日(水)10:00~11:30

(博綜館5階第5会議室)

1. 2021年度特定研究・指定研究 研究計画について
2. 「一般研究(本研究)」について
3. その他
・報告事項

○2020年度「特定・指定研究」資料室研究成果報告会

2021年3月23日~(オンデマンド配信)

○2020年度研究員総会

2021年3月24日~(サイボウズによる書面会議)

1. 研究所長及び東京分室長の退任・就任について
2. 2021年度研究倫理/コンプライアンス教育について
3. オンライン研究会・学会開催・参加のサポートについて
4. 真宗総合研究所 特定研究・指定研究・資料室研究成果報告会について
5. 真宗総合研究所への要望・意見について

Eラーニングを活用した「仏教・真宗」教育活動の展開

【研究会】

日時 2020年10月1日(木)14:40~16:00

出席者 箕浦暁雄 戸次顕彰 松下俊英

場所 真宗総合研究所ミーティングルーム

内容 「仏教入門」担当者の進捗状況の確認ならびに意見交換など

日時 2020年10月9日(金)15:30~18:00

出席者 木越康 一楽真 箕浦暁雄 戸次顕彰
松下俊英 難波教行

場所 真宗総合研究所ミーティングルーム

内容 「仏教入門」担当者の進捗状況の報告ならびに講義原稿に関する意見交換

日時 2021年2月18日(木)16:00~18:00

出席者 木越康 酒井恵光 一楽真 箕浦暁雄
戸次顕彰

場所 真宗総合研究所ミーティングルーム

内容 試験撮影動画の確認ならびに今後の方針に

関する打ち合わせ

日 時 2021年2月25日(木)16:45~18:30
出席者 木越康 酒井恵光 一楽真 戸次顕彰
場 所 真宗総合研究所ミーティングルーム
内 容 編集中の試験撮影動画に関する意見交換

日 時 2021年3月10日(水)16:00~18:30
出席者 木越康 酒井恵光 一楽真 箕浦暁雄
戸次顕彰 松下俊英 難波教行
場 所 真宗総合研究所ミーティングルーム
内 容 編集中の試験撮影動画に関する意見交換ならびに今後の方針やスケジュールの相談

【試験撮影ならびにその準備作業】

日 時 2020年11月4日(水)15:00~16:00
出席者 酒井恵光 戸次顕彰
場 所 真宗総合研究所ミーティングルーム
内 容 モニター等の機材確認などの試験撮影のための準備作業

日 時 2020年12月25日(金)13:00~16:00
出席者 木越康 酒井恵光 戸次顕彰 松下俊英
難波教行
場 所 響流館4階録音スタジオ
内 容 「仏教入門」の試験撮影

国際仏教研究

欧米班

【学会参加】

2020年11月29日から12月11日までオンライン形式で開催されたアメリカ宗教学会(AAR)に、マイケル・コンウェイ研究員が以下のそれぞれの部会に参加した(時間は米国東部標準時間)。

2020年11月30日(月)18時15分~ 日本宗教部会
12月1日(火)11時~ 西洋における仏教部会
12月2日(水)10時~ 仏教キリスト教研究協会部会
12月8日(火)9時~ 瑜伽行派研究部会
12月9日(水)16時~ 仏教哲学部会
12月10日(木)16時~ 日本宗教部会

【発送作業】

2021年2月19日(金)13時~16時真宗総合研究所内
ハンガリーのELTEと共催の国際シンポジウム「仏陀の言葉とその解釈」(2016年)の成果出版『The Buddha's Words and Their Interpretations』(2021年)が刷り上がり、井上研究員と研究補助員

(鶴留・千葉)がELTEと国内研究機関・図書館への発送作業を行った。

西藏文献研究

◇研究打ち合わせ

2021年度の研究計画について
日 時:2020年10月23日(金)14:40~16:10
場 所:真宗総合研究所ミーティング・ルーム
出席者:上野 牧生、三宅 伸一郎

◇研究打ち合わせ

『pton仏教史』の校訂テキスト作成に向けての作業方針について
日 時:2020年12月4日(金)14:40~16:10
場 所:真宗総合研究所ミーティング・ルーム
出席者:上野 牧生、三輪 悟士、三宅 伸一郎

清沢満之研究

【ミーティング】

◇第1回

日 時:2020年10月1日(木)16:20~17:50
場 所:プロジェクト研究室ルーム
出席者:西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央
目 的:別巻Ⅱ検討事項の確認

◇第2回

日 時:2020年10月8日(木)16:20~17:50
場 所:プロジェクト研究室ルーム
出席者:西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央
目 的:別巻Ⅱ検討事項の確認

◇第3回

日 時:2020年10月16日(金)13:00~14:30
場 所:プロジェクト研究室ルーム
出席者:西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央
目 的:別巻Ⅱ検討事項の確認

◇第4回

日 時:2020年10月30日(金)13:00~14:30
場 所:プロジェクト研究室ルーム
出席者:西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央
目 的:別巻Ⅱ検討事項の確認

◇第5回

日 時:2020年11月6日(金)13:00~14:30
場 所:プロジェクト研究室ルーム
出席者:西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央

目 的：別巻Ⅱ検討事項の確認

出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央
目 的：別巻Ⅱ検討事項の確認

◇第6回

日 時：2020年11月12日(木)16：20～17：50
場 所：プロジェクト研究室ルーム
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央
目 的：別巻Ⅱ初校の確認

◇第14回

日 時：2021年1月11日(月)13：00～14：30
場 所：プロジェクト研究室ルーム
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央
目 的：別巻Ⅱ再校の確認

◇第7回

日 時：2020年11月20日(金)13：00～14：30
場 所：プロジェクト研究室ルーム
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央
目 的：別巻Ⅱ初校の校正・検討

◇第15回

日 時：2021年1月15日(金)13：00～14：30
場 所：プロジェクト研究室ルーム
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央
目 的：別巻Ⅱ再校の校正・検討

◇第8回

日 時：2020年11月27日(金)13：00～14：30
場 所：プロジェクト研究室ルーム
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央
目 的：別巻Ⅱ初校の校正・検討

◇第16回

日 時：2021年1月21日(木)16：20～17：50
場 所：プロジェクト研究室ルーム
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央
目 的：別巻Ⅱ再校の校正・検討

◇第9回

日 時：2020年12月3日(木)16：30～18：00
場 所：プロジェクト研究室ルーム
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央
目 的：別巻Ⅱ初校戻し原稿作成

◇第17回

日 時：2021年1月26日(火)13：00～14：30
場 所：プロジェクト研究室ルーム
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央
目 的：別巻Ⅱ再校戻し原稿作成

◇第10回

日 時：2020年12月4日(金)13：00～14：30
場 所：プロジェクト研究室ルーム
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央
目 的：別巻Ⅱ初校戻し原稿作成

◇第18回

日 時：2021年1月27日(水)13：00～14：30
場 所：プロジェクト研究室ルーム
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央
目 的：別巻Ⅱ再校戻し原稿作成

◇第11回

日 時：2020年12月7日(月)14：00～15：30
場 所：プロジェクト研究室ルーム
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央
目 的：別巻Ⅱ初校戻し原稿作成

◇第19回

日 時：2021年2月10日(水)14：00～15：30
場 所：プロジェクト研究室ルーム
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央
目 的：別巻Ⅱ検討事項の確認

◇第12回

日 時：2020年12月11日(金)13：00～14：30
場 所：プロジェクト研究室ルーム
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央
目 的：別巻Ⅱ初校戻し原稿作成

◇第20回

日 時：2021年2月17日(水)13：30～15：00
場 所：プロジェクト研究室ルーム
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、澤崎瑞央
目 的：別巻Ⅱ三校の確認

◇第13回

日 時：2020年12月18日(金)13：00～14：30
場 所：プロジェクト研究室ルーム

◇第21回

日 時：2021年2月19日(金)12：00～13：30

場 所：プロジェクト研究室ルーム
出席者：西本祐攝、大舩啓、西尾浩二、藤井了興、
澤崎瑞央
目 的：別巻Ⅱ三校の校正・検討

◇第22回

日 時：2021年2月22日(月)10:00~14:00
場 所：プロジェクト研究室ルーム
出席者：西本祐攝、大舩啓、西尾浩二、藤井了興、
澤崎瑞央
目 的：別巻Ⅱ三校戻し原稿作成

◇第23回

日 時：2021年2月24日(水)11:00~12:30
場 所：プロジェクト研究室ルーム
出席者：西本祐攝、大舩啓、藤井了興、澤崎瑞央
目 的：別巻Ⅱ三校戻し原稿作成

◇第24回

日 時：2021年3月12日(金)13:00~14:30
場 所：プロジェクト研究室ルーム
出席者：西本祐攝、大舩啓、藤井了興、澤崎瑞央
目 的：残務確認

◇第25回

日 時：2021年3月24日(水)13:00~14:30
場 所：プロジェクト研究室ルーム
出席者：西本祐攝、大舩啓、藤井了興、澤崎瑞央
目 的：残務確認

【刊行物】

題名：『清沢満之全集』別巻Ⅱ
出版社：岩波書店
刊行日：2021年3月26日(金)

大学史資料室

【史料調査】

2020年10月に学内から1件、学外から2件の所蔵史料に関する問い合わせを受け、調査・報告を行った。上記の活動以外にも、大谷大学史料室では大学史資料の調査・整理や、貸し出しへの対応を日常業務として行った。

【ミーティング・資料確認・整理作業】

◇第1回

日 時：2020年10月9日(金)10:00~12:00
出席者：ダシュ ショバ ラニ、箕浦るみ子、

岩崎千尋

会 場：真宗総合研究所フリースペース
内 容：資料整理

◇第2回

日 時：2020年10月19日(月)16:00~17:00
出席者：ダシュ ショバ ラニ、岩崎千尋
会 場：真宗総合研究所フリースペース
内 容：資料確認作業

◇第3回

日 時：2020年10月30日(金)15:00~16:30
出席者：ダシュ ショバ ラニ、箕浦るみ子、
岩崎千尋
会 場：真宗総合研究所フリースペース
内 容：資料確認作業・資料整理

デジタル・アーカイブ資料室

【公開国際シンポジウム】

日 時：2021年2月26日(金)18:00~20:00
出席者：デジタルアーカイブ資料室およびハイデル
ベルク大学との共同シンポジウム
会 場：オンライン
テーマ：The Digital Preservation of Asian Manuscripts and Documents

【ミーティング・資料確認・情報交換】

◇第1回

日 時：2020年10月8日(木)20:00~21:30
出席者：ダシュ ショバ ラニ、スチャード・スリ
セッタヴォラクル（嘱託研究員）
会 場：オンライン
内 容：「大谷貝葉」のデジタル化に関する議論

◇第2回

日 時：2020年10月9日(金)13:00~15:30
出席者：ダシュ ショバ ラニ、柏原信行
会 場：オンライン
内 容：『大谷貝葉目録』の作成及び関連資料に関する情報提供

◇第3回

日 時：2020年10月15日(木)19:00~21:00
出席者：ダシュ ショバ ラニ、スチャード・スリ
セッタヴォラクル（嘱託研究員）
会 場：オンライン
内 容：「大谷貝葉」の使用文字のローマ字入力議論

◇第4回

日時：2020年12月5日(土)15:00~16:30
出席者：ダシュ ショバ ラニ、スチャード・スリ
セッタヴォラクル (嘱託研究員)
会場：オンライン
内容：資料確認作業・資料整理

鐘宜錚、ほか

【公開シンポジウム】

◇タイトル：近現代日本の監獄教誨と宗教
日時：2021年3月13日
場所：オンライン (Zoom)
講演者：繁田真爾、アダム・ライオンズ、
江連崇 (コメント)
出席者：井黒忍、青柳英司、大澤絢子、荻翔一、
鐘宜錚、ほか

◇第5回

日時：2021年2月17日(水)19:00~20:30
出席者：ダシュ ショバ ラニ、ハイデルベルク大
学の研究者6名、真宗総合研究所事務局、
大谷大学情報コアスタッフ
会場：オンライン
内容：シンポジウム開催に関する打ち合わせ

【出張】

◇2020年11月14日~11月15日
出張先：花尾かくれ念仏洞、真宗大谷派願立寺、土
橋かくれ念仏洞、真宗大谷派鹿児島別院、
鹿児島県立博物館、黎明館
要務：「隠れ念仏」に関する史跡・史料の調査
出張者：井黒忍、青柳英司、荻翔一、鐘宜錚

◇第6回

日時：2021年2月19日(金)12:30~13:30
出席者：ダシュ ショバ ラニ、スチャード・スリ
セッタヴォラクル (嘱託研究員)、真宗総
合研究所事務局
会場：オンライン
内容：シンポジウム開催に関する打ち合わせ

個人研究青柳班

【出張】

◇2021年3月24日~3月26日
出張先：大谷大学図書館 (京都府京都市北区小山上
総町)
要務：大谷大学図書館所蔵の資料を活用した資料調
査
出張者：青柳英司

◇第7回

日時：2021年2月22日(月)20:00~22:00
出席者：ダシュ ショバ ラニ、スチャード・スリ
セッタヴォラクル (嘱託研究員)
会場：オンライン
内容：シンポジウムの発表内容の確認作業

個人研究大澤班

【出張】

◇2021年3月15日
出張先：宮越屋珈琲 町田店 (東京都町田市原町田
6丁目11-6) *相手方に所属先がないた
め、喫茶店での打ち合わせとなった。
要務：星野健一氏 (法華仏教研究会) との共同研
究打ち合わせ
出張者：大澤絢子

■東京分室

東京分室指定研究

【公開シンポジウム】

◇タイトル：日本仏教を生きる女性たち

日時：2020年10月25日
場所：オンライン (Zoom)
講演者：丹羽宣子、山内小夜子、福島栄寿、
ダシュ・ショバ・ラニ (コメント)
出席者：井黒忍、青柳英司、大澤絢子、荻翔一、
鐘宜錚、ほか

個人研究鐘班

【出張】

◇2020年11月5日~11月6日
出張先：立命館大学生存学研究所、立命館大学図書
館 (京都府京都市北区等持院北町56-1)
要務：立命館大学生存学研究所書庫および立命館
大学図書館での資料閲覧・資料収集
出張者：鐘宜錚

【公開研究会】

◇研究会名：臨床宗教師から考える仏教の現在と未来

日時：2020年12月7日
場所：オンライン (Zoom)
講演者：井川裕覚
出席者：井黒忍、青柳英司、大澤絢子、荻翔一、

■一般研究出張関係

一般研究 阿部班

◇2020年12月18日

出張先：アジア経済研究所（千葉県千葉市美浜区若葉3-2-2）

要務：一般研究に係る資料の閲覧

出張者：阿部利洋

■組織

□研究所委員会

江森 英世（研究・国際交流担当副学長、真宗総合研究所所長）

Dash Shobha Rani（真宗総合研究所主事）

村山 保史（大学院文学研究科長）

山内 美智（教育研究支援部事務部長）

岡田 治之（教育研究支援課長）

松川 節（教授）

阿部 利洋（教授）

箕浦 暁雄（教授）

新田 智通（准教授）

藤原 正寿（准教授）

井黒 忍（准教授）

■人事

■真宗総合研究所所長

（新）江森 英世（旧）浦山 あゆみ

（2021年4月1日付）

■東京分室PD研究員

□新規採用（2021年4月1日付）

* 陳 宣聿

□解任（2021年3月31日付）

* 大澤 絢子

■特別研究員

□新規採用（2021年4月1日付）

* 平田 絵未

現 職：任期制助教

研究期間：2021年4月1日～2024年3月31日

研究課題：日本語話者のための韓国語発音教案開発

—語頭平音の音響音声学的考察を中心に—

* 濱野 亮介

現 職：非常勤講師

研究期間：2021年4月1日～2023年3月31日

研究課題：中国近世における儒・仏・道三教の死者

儀礼と明朝宗教政策との関連について

* 高橋 学而

現 職：一般研究武田班①協同研究員

研究期間：2021年4月1日～2024年3月31日

研究課題：9～13世紀の北アジア諸民族国家にお

ける多民族共生社会成立の歴史考古学的総合研究

□解任（2021年3月31日付）

* 野村 実

研 究 所 報 第 78 号

2021年9月1日 発行

編集発行 大谷大学真宗総合研究所

〒603-8143 京都市北区小山上総町

Tel. 075-411-8498 Fax. 075-411-8435

Email. kenkyusyo@sec.otani.ac.jp

©2021 Otani University Shin Buddhist Comprehensive Research Institute